仮面ライダー × 仮面ライダー × 仮面ライダー 超スピンオフRe/birth

バース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー×仮面ライダー×仮面ライダー 超スピンオフRe
/birth

【Nコード】

N6361V

【作者名】

バース

【あらすじ】

あの『超DCDスピンオフ!!』がリ・バースして帰ってきた!!
コント劇、番外編、コラボ：そして何より仮面ライダーバース!!
勿論地獄兄弟のあの2人やウヴァさん中毒のあの2人も登場、更
なんと仮面ライダーバースも登場!!
後藤慎太郎とその仲間達が巻き起こす、笑いと友情とドリルアーム
とクレーンアームとシヨベルアームとキャタピラレックとプレスト
キャンオンと『カッターウイング』の物語、ここに開幕!!

俺がバアアアアアアアアアアアアアアアアアスだぁ
ああああああああああああああああああああ
あああああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

オトヤ「うん、でも小説とか感想とか全部消えちゃったから…再興には時間かかかりそう…。」

後藤「だが俺がバースな事には変わりはない。そう、何故ならば俺がバースだからだ!!!」

アインハルト「とりあえず、前作でも初回は作品紹介でしたし…やりましょうか？」

和葉「丁度オズクラとダキバは紹介されて無かったし、丁度いいかもね？」

アインハルト「オズクラ復活してませんが」

映司「orz」

和葉「orz」

後藤「brs」

オトヤ「後藤さん、その体制どうやって取ってんの!？」

後藤「コレか？髪をリーゼントにしてブリッジやっているだけだが？」

アインハルト「画期的!？」

咲華「そろそろ始めない？」

バース的1作目：『仮面ライダーダークキバVivid-Renobirth-』

オトヤ「とりあえず自己紹介しようか？僕は主人公の登オトヤ／仮面ライダーダークキバ！特技はえーっと…絶滅タイム！！」

ヴィヴィオ「それは特技じゃない!?」

オトヤ「うーん…じゃあ料理？母さんがいない時、父さんとヴィヴィオがお互いを殺しあわないように。」

ヴィヴィオ「orz」

アインハルト「オトヤ君！女の子に何て事言うんですか!!」

ハジメ「登、お前最低だな。」

映司「オトヤ、言いすぎだよ…。」

和葉「もう少しオブラートに包んで…、」

後藤「バース風に言い換える。」

咲華「ヴィヴィオちゃんに謝りなさい。」

オトヤ「酷い言われよう!?」

ダキバット「どうだオトヤ、私の苦しみ分かったか？」

アインハルト「えっと…じゃあ、続いては私、アインハルト・ストラトスです。オトヤ君とはクラスメイトで…特技は格闘技です！」
ヴィヴィオ「アインハルトさんすごく強いんだよ！」

映司「へー、凄いね！そんなに若いのに…。」

和葉「ほんと、尊敬しちゃうよ！」

後藤「バースにならないか!？」

アインハルト「後藤さんののは全力でお断りさせていただきます。」

ハジメ「あ、ちなみにストラトスは登の…、」

オトヤ「言っなああああああああああ!!!!!!」

数分後…、

ハジメ「登の友達だと言おうとしたただけだ。何をそんなに焦っている？」

オトヤ「だつた物」

映司「オトヤあああああ!!??」

アインハルト「オトヤ君、何を焦ってたんでしよう…?ま、まさか私と友達だという事が…そんなに嫌だと…?…グスツ。」

ヴィヴィオ「…クリス、セットアップ。」

数分後…、

オトヤ「だつた形跡があつたと思われる生もの」

映司「オトヤああああああああああああああああああああああああああああ!!!!!!!!!!」

ヴィヴィオ「で、私はオト兄の妹の登ヴィヴィオ!原作での名前は高町ヴィヴィオだけど…こっちはママの苗字変わってるから登姓で!」

和葉「ヴィヴィオちゃんも格闘技やってるんだよね?結構強いんだって?」

咲華「アンタも護身用に少し教えてもらいなさいな。」

ヴィヴィオ「えへへ リオとかコロナといつも練習してるからそれなりに…少なくともオト兄よりは強いよ!」

映司「うん、それはさっきのアインハルトちゃんの紹介で嫌って言うほどわかったから。だからこれ以上オトヤの原型を変えないで上げて！！彼から『人が持てる最低限の権利』を剥奪しないで上げて！！」

アインハルト「あ、オトヤ君人間じゃ無いですよ？」

映司「俺さ、どうしてそこまで心無い一言が次から次へと出てくるのか不思議で堪らないよ…。」

アインヴィヴィ「？」

オトヤ「orz」

咲華『元気出さない。』

和葉「生きてればそのうち良い事あるよ？」

後藤「生きてないとバースになれないぞ？」

ハジメ「そのバース、永遠に黙ってる。」

後藤「だが断る。何故ならば俺はバースではないからだ！！バースは伊達さんしかありえない！！！」

ハジメ「ダメだコイツ面倒臭すぎる…。」

ハジメ「で、俺の紹介だが…俺は剣立ハジメノカリス。ストラトスとそこで死に掛けている登とはクラスメイト。特技はお菓子作り。」
和葉「ダキバメンバーってどう考えても男子組と女子組の特技が逆な気がする…。」

アインハルト「それは偏見ですよ和葉さん。」

ヴィヴィオ「ハジメさんは剣立カズマさんとフェイトさんが経営する『ACE』の居候さん何だよー！」

ハジメ「詳しくは前作『仮面ライダーダークキバVivid-JOKER - 聖王、霸王、帝王』をチェックしてくれ。」

映司「もう無理！！永久に無理！！！」

後藤「だが俺は永久にバースだ。」

咲華『どんなお菓子作れるの？』

ハジメ「最近ではクロカンブッシュを覚えた。」

咲華『式場レベル!?』

ハジメ「あと、コアラのーチもな。」

咲華『幅広い!?』

ハジメ「他には…あ、ベビースーラーメン応用したチキンーメンも。」

咲華『もはやお菓子じゃない!』

ハジメ「あの卵ポケットを作るのは苦労したよ。」

咲華『アナタの仕業かあああああ!!!』

パース的第2作：『ダブルクライン〜鐵〜』

ヴィヴィオ「しっつもーん!」

映司「はいヴィヴィオちゃん。」

ヴィヴィオ「このタイトル、何て読むんですか?」

咲華『ダブルクライン^{クロガネ}鐵よ。智春さんの機巧魔神の名前。』

映司「略し方は『ダブクラ』から『ダブクロ』でお願いね。」

後藤「俺的には『ダブルクライン〜伊達〜』がよかったな…。」

『プット! ティラ〜ノ! ヒツサ〜ツ!』

映司「…ふう。」

和葉「後藤さあああああん!!!」

咲華「オトヤ君の時はあんなに必死に止めてたのに…どうして後藤さんには容赦無いの?」

映司「うくん…なんと言うか、バースだから?」

和葉「それで納得できてしまう私はきつともう取り返しのつかないところまで来てるんだろっなあ…。」

ちなみにダブクラは面倒くさいので紹介割愛。

ダブクラメンバー「orz」

バース的3作目になるであろう:「オースクライン〜玻」

アインハルト「しっつもんっでーす!」

映司「はいアインハルトちゃん。」

アインハルト「タイトル何て読むんですか?」

咲華「オースクライン^{カルセドニ}玻よ。和葉と私の機巧魔神の名前。」

映司「略し方は『オズクラ』から『オズカル』でお願いね。」

後藤「俺的には『オースクライン〜信長』がよかつたな…。」

「タカ!クワガタ!ライオン!サイ!シャチ!コブラ!ギガスキャ
ン!」

映司「…ふう。」

オトヤ「後藤さああああああああん！！！！！」

ハジメ「あ、起きたか登。」

アインハルト「おはようございます。今日も良い天気ですね。」

オトヤ「お前どこまで遡るつもりだよ!?」

映司「じゃあ自己紹介を…俺は火野映司／仮面ライダーオーズ！
仮面ライダー○○○』とオズカルの主人公だよ！趣味は…えつと…。」

後藤「火野、無理はするな。」

映司「えつと…えつと…あ！一つあった！」

和葉「へえ、映司さんの趣味ってなんでさ、」

映司「パンツ観賞！！！」

咲華「シヨウイチさああああああん！！【アギトの世界】で警察だった芦川シヨウイチさああああああん！！！！ここに！！ここに
変質者がああああああ！！！！」

アインハルト「嫌ああああ！！うわああああん！！うえええええん！！」

ヴィヴィオ「死ぬ。」

ダークキバ「火野映司…絶滅タイムいつとくか…?」

バース「火野、お前俺が元警察って忘れて無いか？」

和葉「奏先輩に電話します！」

映司「ちよ、ちよつと皆誤解だつて！！俺、女の人のパンツなんか

見ないよ!？」

バース「…まあ、そうだよな…。お前に限ってそんな…」

映司「ちゃんと男性用だよ!！」

バース・デイ「お前やつぱ一回牢獄ぶち込む。」

和葉「で…私の番だね! 苑宮和葉! 洛校1年生の15歳(オズカル時)! 夏目智春の義理の妹です! 趣味は…そうだなあ…あ、蕎香ちゃんと遊ぶ事!」

アインハルト「…。」

ヴィヴィオ「…。」

オトヤ「…。」

ハジメ「…。」

和葉「アレ? 皆どうしたの…?」

ダキバメンバー「…」変態揃いのクライン系統に指す一筋の光を見ました。「…」

咲華「そのメンバーに…まさか私入って無いわよね…?」

和葉「ちなみに映司さんと後藤さんはオズクラの時は私の命の恩人なんだよー! オズカルではどういう出会い方になるかわかんないけど。あと映司さんは蕎香ちゃんの事も助けてくれたんだー!」

ヴィヴィオ「その蕎香さんって方とは普段どんな事してるんですか?」

和葉「うんとねー…一緒にお買い物行って…カラオケ行って…ご飯食べて…ゲーセン行って…あ、後は一緒にイベント事に参加したり

！
「オトヤ「和葉さん…アンタ女神や…ほんまもんの女神や…（涙）」
和葉「ええ！？何で泣いてるの！？」

ハジメ（だってここ、そこまでもともな回答する奴いないからな…。）

「アインハルト「…オトヤ君って…和葉さんみたいな方が好きなんですか…？」

「オトヤ「へ？」

「アインハルト「そうですね和葉さん優しいですし可愛いですし人当たり良いですし何より『まとも』ですもんね…私なんかじゃとても及ばないほど素敵な方ですよねそうですねどうなんですか答えてくださいだいたいあと5秒以内に。」

和葉（あ、オトヤ君終了のお知らせだ…。）

後藤「俺はバースだ。」 紹介終了

咲華『最後は私の紹介ね？和葉の射影体の咲華よ。ちなみに読み方は『さいか』ね。』

和葉「原作だと咲華、射影体じゃ無いし私の心の中にある人格だから…実は一番設定変わったんだよね？」

後藤「それでも俺がバースだという設定は誰にも変えられないがな。」

「映司「いやあ、俺初めて咲華ちゃん見た時はびっくりしたよ。幽霊って本当にいるんだーってさ。」

「アインハルト」

「咲華『アインハルトどうしたの？』」

「オトヤ「あ、彼女に怖い話はNGで。」

「咲華『私の存在の全否定！？』」

和葉「自分で『怖い話』って認めちゃったよこの子!？」
ハジメ「で、趣味は？」

咲華「趣味って言われても…幽霊だからコレといって無いのよねえ
…あ、和葉弄り？」

和葉「何それ酷い!？」

映司「まあまあ。咲華ちゃん、コレを機に趣味見つけてみない？楽しいよ、パンツ。」

後藤「火野、後で一緒に警察に行こうな？咲華ちゃん、バースになるのは楽しいぞ。」

咲華「出来るだけ物理的なものは無しの方で。」

後藤「ならコレしかないだろう、伊達さん観賞。」

咲華「女子高生が中年の石黒隊長見て何が楽しいんですか？」

オトヤ「じゃあ、散歩？」

咲華「和葉と離れる事が出来ないので無理。」

ヴィヴィオ「空中ストレッチ！」

咲華「傍から見たらただの変人（見えないけど）」

アインハルト「

咲華「何かゴメン。」

ハジメ「なら和葉さんと一緒に学校生活楽しめば良いんじゃないか？和葉さんとしか話せないけど、同じ体験は出来るわけだし。」

咲華「それだー！ー！というわけで和葉、明日から一緒に勉学に励みましよう!ー!」

和葉「私巻き添えー！ー!?!?!」

結論

・オトヤ 不憫

・ヴィヴィオ 毒舌（第二のフィリップ位置）
・アインハルト 触るな危険
・ハジメ パティシエ
・映司 犯罪者予備軍
・和葉&咲華 今後も是非とも頑張っ
て欲しい（第二の辰巳シンジ
位置）

・後藤 仮面ライダーバース

後藤「次回の話でも俺がバースだ!!」

バース1（伊達さん）：スピノフ、リ・バース！！（後書き）

次回！！

バース2（後藤さん）：夏と言えば怖い話

バス2（冬バス担当後藤さん）：夏と言えば怖い話

鳴桜邸

オトヤ「暑iiiiiiiiiii……。」

アインハルト「暑いです……。」

後藤「おい、もう少しエアコンの温度下がらないのか？」

智春「その分の電気代後藤さんが払ってくれるんだっいたらいいですよ。」

操緒『いいじゃんそんなぐらい!?!』

映司「今日は和葉ちゃん達じゃなくて智春とサオちゃんなんだ……あ

……暑い……。」

アニア「エアコンの温度下げろ。」

智春「やああああめえええろおおおお!……!」

ルーテシア「そんな時こそおおおおおおお!……!……!」

全（）（）うわっ、出たよ夏場に一番会いたくない登場人物ナンバー1……（）（）

ソウジ「夏といえば……!」

全（）（）あ、ナンバー2だ……（）（）

シヨウイチ「都市伝説や怪談、つまりは怖い話だ!!今回は警察の人脈で聞いた話や実際にあつた事件をこの俺が赤裸々に語っちゃうぞ」

全（（マジかよナンバー3までいやがる…。）（。））

アインハルト「怖い嫌あああああああ!!!!!!」

バース2（冬バース担当後藤さん）：夏と言えば怖い話

智春「樋口がいたら飛び上がって喜びそうなお題だなあ…。」

操緒「いなくて本当に良かったね。」

アニア「アイツがいたら色々面倒だ、何せ夏場に会いたく無い人物ナンバー4だからな。」

後藤「怖い話しか…実は俺、この手の話題は得意だぞ。」

映司「へーそうなんですか？意外ですね…。」

後藤「ああ、何せ俺はバースだからな。」

映司（前言撤回、やっぱりいつも通りの後藤さんだった。）

後藤「バースに不可能は無い。」

アインハルト「帰る!!私帰る!!!!」

アニア「おい、コイツどうした？口調とかキャラとか色々崩壊して見てて中々面白いぞ?」

オトヤ「この子、怖い話とかダメなの。『真・仮面ライダー』見て絶叫上げるぐらいだから…。」

アニア「いや、あのビデオは…普通に仮面ライダー見るつもりで見るとだいたいは絶叫あげるぞ？」

操緒「私見ても平気なの？」

智春「お前は幽霊らしく無い。」

ルーテシア「んじゃ、早速私からいくわよー」

アインハルト「いいいいいいいやああああだああああ!!!!!!」

とある所にね、1人の女の人がいたの。

その女性の家はとても貧しくて…彼女は生きていく為の知恵を得るので精一杯で、友達や恋人なんてものは一切出来なかった。

そんな彼女が辿った末路はね…『犯罪者』

しかも殺してお金を奪い取ると言う最悪の…。

彼女が殺してきた人の数は本当に数え切れない…一体、その手を何人の人の血で染めた事でしょう？

でもそんな彼女にも…徐々に終わりが訪れていた。

とある暴力団の頭を殺してしまったのよ。

殺して奪ったお金は数百万…彼女は満足気にその場所を後にしたわ。でもね…その様子を見られていたのよ…その頭の部下に…。

それからあつと言う間だったわ…。

薄れていく意識の中で、彼女はある物を見たの。

白い悪魔の様な男がコンバットナイフで彼女を殺した男達を次々と倒していくのをね。

「いい死体が手に入った。」

男はそう言っていると彼女を抱きかかえて帰って行ったわ。

後藤「だが『カポーンッ!』という音は良く聞こえるだろう?」

映司「うーんと…じゃあ、次俺行こうかな?」

アニア「映司、アインハルト殺さない程度にな。」

智春「紛争地の事とか話さないで下さいね。」

映司「そんな事話さないよ罰当たりな!? そうだね…あ、じゃああ
の話を…」

ルー三十路「『わくわく!』」

アインハルト「ビクビク!」

オトヤ「アイン、その辺で別の事やってればいんじゃないの…?」

これは実際にあつた事なんだけど…ある所に、とても寂しがりやな
男がいたんだ。

彼は今までずっと仲間と4人で暮らしてた。

ずる賢いけど彼を一番理解してくれていた親友…面倒見の良い姉貴
分…甘えん坊な弟分。

4人はいつまでも一緒だった…はずだった。
でもね…、

「カザリ…お前、裏切ったのか?! ガメルとメズールを…あの2人
をよくも…!」

「フフ…あの2人を殺したのは、GKB50の方々じゃないか…も
う、昔とは違うんだよ、じゃあね。」

「おい!! 待てカザリ!! カザリいいいいいい!!…!!…!!」

親友の裏切り…そのせいで失われてしまった2人の尊い命。

男は絶望した。

親友を止められなかった事と、仲間を助ける事が出来なかった自分の無力さに…。

でもその時、彼に転機が訪れた。

2人を復活させる方法を見つけたんだ。

半年に及ぶ苦労の末…男はとうとう2人を甦らせる事に成功。

今度は親友を元に戻す為、3人は親友の下へと乗り込んだ。

2人の復活に驚く親友だったけど、すぐに冷淡な表情になり3人を襲い始めた。

3人束になっても敵う事は出来ず…その時、男の姉貴分がこう言った。

「ま、待って！あなたにつくから…皆で彼を殺しましょう？」

「め、メズール…一体何を！？ソイツは裏切り者だぞ！！」

「メズールが行くなら、俺も、行くー！」

予想外な事に2人に裏切られた男。

勿論、その結果は目に見えていた。

男の体はバラバラに引き裂かれ、粉々に。

その場を立ち去っていく親友達…その時だった。

ピクッ！

男の一部が動いたのは…、

その一部は…去っていく親友達を憎憎しげに見つめながら…最後にこう呟いた。

こ の ま ま で は す ま

後藤「俺が行こう。」

シヨウイチ「orz」

ソウジ「仕方ないさ芦川、とりあえず飲みにも行こうか？」

シヨウイチ「畜生…ウヴァ酒してやるう…!!」 帰宅

オトヤ「あの2人何しに来た!？」

アインハルト「怖い嫌ああああ!!お母さあああああん
!!!!!!」

智操「『見ているこつちが何か辛くなつて来た…。』」

後藤「アインハルトちゃん、そんな事じゃバースになれないぞ？」

アインハルト「なる気無いですから!!だから帰して下さい今すぐ
に!!!!!!」

智春「後藤さん、アンタ少し黙つててください。」

後藤「残念だが今から俺が話すのでそれは無理な相談だ。…さあ、
怖い話で振り切るぜ!!!」

あるところに世界平和を望む青年がいた。

成績優秀な男で、とある企業では一隊の隊長も務めていたんだ。

だが、そんな彼にも限界があった…『自分の手だけでは世界は守れ
ない』、そう感じた。

そんな時、彼の耳にある噂が飛び込んだ。

世界を守るためのシステム使用者の査定試験

勿論彼は飛びついた。

それからだったんだ…青年の辛く苦しい訓練の日々が始まったのは…。

新年にランニング…会長秘書の靴磨き…会長の作ったケーキの後処理…オーズへの誤砲…。

その全てが積み重なり、とうとう彼は運命の日を迎えた。試験当日だ。

自信はあった…必ず受かる、と…。

しかし、運命とはあまりにも残酷すぎた。

何故ならば…、

システム使用者はすでに企業の方で決められていたんだ。

選ばれたのはなんと、企業に属さない一般人の石黒隊長。青年は絶望の淵に立たされた。

「あんなに頑張ったのに…なんでだよ…どうしてなんだよ…!!畜生…ちつくしょう!!!!」

雨が降る中、傘をさす事も忘れ…彼は一心不乱に走り続けた。ただひたすら…我武者羅に…。

別に目的なんか無い、ただ走らなければならぬと思ったんだ。しばらくすると、彼はとある場所に辿りついた。

そこで力尽きた彼は、彼に近づく2人の女性を見た。

その姿は…まるで天国からの使者の様だった…。

丁度その大学生グループのリーダーが生まれた病院で、彼が父に抱かれて帰った凡そ3週間後に潰れた。

理由は…火事だ。

彼にとつては幸い…と、言つて良いのかわからないが、何でも務めていた医者の方が手術に失敗し、その鬱憤晴らしに軽い気持ちでシートに火をつけたらしい。

すぐに消せば大丈夫だろう…そう思つてライターで火をつけたが、火は瞬く間に部屋を包み込み、病院全体を包み込むのにそう長い時間はいらなかった。

全焼した病棟…しかし完全に潰すにも相当な費用が掛かる為、現在でもこうして残っている。

「お前、ここで生まれたんだろ？何か皮肉だよな…生まれた病院に肝試しにくるのってさ。」

「うるせえよ。んじゃ、ちやっちやと済ませてとつと飯行こうぜ。」

リーダーの青年…ここでは仮に火野映司としておこう。

映司「ライ！？」

映司達は立ち入り禁止の看板をどけ、どんどん中へと入っていく。不気味だった。

そりゃそうだ、計画的に潰したわけでは無く突然つぶれてしまったわけなのだから、そこら辺の心霊スポットなんかよりよっぽど生々しさがある。

そう言えば…と、映司は持っていた携帯電話を取り出して検索を掛けて見た。

調べるのは勿論、この病院について。

何でも、患者や医師の遺体は全て回収されたらしいが…1人だけ、回収されていない遺体があるらしい。

名前は不明だが、それだけは確かだそう。

「おい映司、こっち何か妙なもんあるぞ?」

「何だよアंक? あ、いこう比奈ちゃん、後藤さん。」

映司「比奈ちゃんとアंकいるの!?!」

後藤「俺もか!?!」

アニア「うるさい黙って聞け。」

アंकに呼ばれて4人が向かった先にあつたのは…癌専用の集中治療室。

そこに落ちていた…1つのネックレス。というより、ポケットだ。

中を開けてみると、そこには若い男と女が映った写真が。

恐らく事故の最中、ここで手術を受けていた者の遺物だろう。

「可哀想だな…恋人いたのに…。」

「ですね、あれ? 映司君どうしたの?」

「…え? あ、ああ何でも無いよ。」

何故だろう、映司は考えた。

この写真に写っている2人を見てみると妙に心が安らぐ。

ポケットをポケットに突っ込み、部屋を出て行くこととする4人…だ

けど、その時だった。

『…………。』

「……!?!?!」

妙な声がしたんだ。

女性の声だった。

辺りを見回してみるのが誰もいない…いるのは彼ら4人だけ。
女性は比奈しかおらず、彼女の声にしては妙に大人びている。
恐怖する4人…いや、映司だけは、その声に耳を澄ませていた。

『…じ…えいじ…。』

「…………まさか…?」

『映司。』

この声を聞いていると、何故か心が穏やかになっていく。
ゾクツと、背中に悪寒を感じた。

そして…彼が振り返った先で見たもの…それは…、

『ワ タ シ ノ カ ワ イ イ エ イ
ジ、ワ タ シ ヲ ム カ エ ニ キ
テ ク レ タ ノ ネ?』

胸部が切り裂かれ、全身が焼きただれた女性だった。

数日後、映司はとある病院で目を覚ました。

彼の見舞いには映司の父も来ており、友人達3人も彼を心配して病院に来ていた。

聞いた話によると、映司はあの妙な声を聞いた後で突然倒れ、そのまま数日眠っていたらしい。

「ああ、良かった映司…お前が無事で…。」

「父さん…俺、あの廃墟でこんなの見つけたんだ。」

そう言い、映司が取り出したのは例のロケット。

父はそれを見て大変驚いた表情に。

彼は少し顔を俯かせると、その後で友人達を帰し、映司だけに話をした。

実は映司の母親は乳がんを患っており、妊娠中も母子共に危険な状態にあった。

それでも子供は生みたい！…そんな想いを捨てきれず、彼女は出産
幸い生まれた映司には何の影響も無く、しばらくしてから映司は父
と共に帰宅。

母の乳がんの手術を3週間後に控えた時だった。

「お前が元気になったら、映司と一緒に迎えに来るよ。」

「本当？約束よ？」

コレが夫婦が交わした最後の言葉。

何と言う神の悪戯か…あの病院にいた人達の命を簡単に奪い去って
いたあの大火事は、皮肉にも映司の母の手術中に起こった…。
きつとあの声は、息子が自分を迎えに来てくれたという…母の心か
らの『欲望』が最愛の息子に見せた幻だったのかもしれない…。

オトヤ「怖いけど…切ないな何か…。」

映司「うう…か…母さああああああああん！！俺、俺今
すぐ家帰ります！！母さんに『俺は元気だよ！』っていつところ
見せてきます！！変身！！！！」

『ライオン！トラ！チーター！ラッタ！ラッタ〜！ラトラ〜ター！
』！

『スキヤニングチャージ！！』

オーズ「せいやあああああああああああああああああああ

・アニア以外まともな話ししてません。

バース2（冬バース担当後藤さん）・夏と言えば怖い話（後書き）

今回はコラボ！！

バース3：正直、ガンバライド目的で溜めたメダルの今後の使い道にめっさ悩む

コラボ相手は…ガタツク時代に最も長く交流してたあの方です。

後藤「マリン、お前がバースだ！！！」

バース3（実質的初代バース信長）：正直ガンバライド目的で集めたメダルの全

オトヤ「今日のスピノフは特別篇！」

アインハルト「なんと、リ・バースしてからの初のコラボです！」

後藤「そんな中でも俺は平常運行でバースだ。」

嵩月「後藤さん後で燃やす。」

映司「奏ちゃん、とりあえず後藤さん制裁用の焰月は危ないからしまおうね？」

嵩月「それ言うなら映司さんも後藤さん抹殺用のガブリューしまつて下さい。」

アインハルト「誰が来るんですかね？」

後藤「バースだ。」

オトヤ「を気にしたら負けだと思ってください。」

映司「今回はね……えーっと……」企画書取り出す

嵩月「なにになに？…ガタツク時代に一番長く交流していた方ですか…？という事は…、」

映司「あの人しかないね…。」

後藤「伊達さんか！？」

『トリプル！スキヤニングチャージ！！』

つぼみ「少々ですなこ」…。」
いつき「だねー。」
マーベラス「派手に行くぜ!!!」
凱「仮面ライダーの皆さんとお知り合いになるぞー!!!」
響（ゴーカイの連中が異常にテンション高い件について）
えりか「って後藤ちゃんが死に掛けてるー！ー！ー！？」
奏「私がリズムだ。」

バース3（実質的初代バース信長）：正直ガンバライド目的で集めたメダルの今後の使い道にめっさ悩む

映司「というわけで、キュアノアさんの『リリカルキュアライダー学園』からハートキャッチプリキュアのつぼみちゃん、いつきちゃん、えりかちゃん、スイートプリキュアの響ちゃんと奏ちゃん、おまけに海賊戦隊ゴーカイジャーのマーベラスさんと凱君です。」
後藤「伊達さんじゃ…無い…だと!? orz」
映司「何気に、ここにいるプリキュアの皆さん、バースキャラと仲良い方多いです。」

嵩月「つぼみさん、南野さん、お久しぶりですね。」
つぼみ「はい！確か…こっちのクラブの時以来ですかね？」
奏「嵩月さんも相変わらず悪魔で安心しました。」

嵩月「あ？」

奏「いいで何でもないですホントすいませんごめんなさい。」

いつき「オトヤ君も元気そうだね。」

オトヤ「ええ、元気に絶滅してます（主に自分とダキバットが）。
いつき「そういえば今回の内容って聞いている？」

オトヤ「企画書によると…前にそっちでコラボった時がダイスオー
なのでガンバライドネタみたいですよ…タイトル的に。」
いつき「そうなんだ、ガンバろうね。」

オトヤ「誰が上手いことを言えと？」

アインハルト「……………。」 全て飲みこむ霸王オーラ

オトヤ「アイン…どうしたのその狂気に満ちた最凶オーラ？」

アインハルト「………何でもないです、続けてください。」

オトヤ「…はあ…？」

マーベラス「派手に行くぜ!!!」

凱「ガンバライドとお知り合いになるぞー!!!」

後藤「俺がバースだ!!!」

えりか「私もバースだ!!!」

響「実は私もバース、」

『プット！テイラー！ノ！ヒツサ！ツ！』

アクセセル「ああ…さあ、全力で振り切るぜ!!」
オーズ「ひいつ!!」け、ケイスケケイスケ…あそこあそこ…、
イクサ「!!!!!!…奏さんとつぼみちゃんが…途轍もない魔神才
ーラを…この勝負…、」

オーズ&イクサ「負けられない(命の危険性が極めて高いため)
!!!!!!」

オーズ&イクサ「うおおおおおおお!!!!!!!!
負けるかああああああああああ!!!!!!」ゲキ
レツアイコン2つ揃った

ジョーカー「つて、ええ!?いきなりかよ!?!」

アクセセル「振り切れないぜ!?!」
オーズ&イクサ「絶対にかあああああああああああああ
つ!!!!!!!(死にたくないから)」

ジョーカー&アクセセル「」 999ダメージ

響&奏「一発目のダメージ量じゃねええええええええええ!!
??」

嵩月「映司さん、よく出来ました」

つぼみ「ケイスケさん、おりこうさんです」

オーズ&イクサ「光栄であります!!!!!!」 敬礼

【ラウンド2】

響「ならこっちは…よし!!青のメダルでボウギョ強化!」
奏「頑張つて翔太郎さん!照井さん!」

嵩月「映司さん、このコンボで。」 紫指示
つぼみ「ケイスケさん、余計な真似すんなよ？」
オーズ&イクサ「了解しました女王様！！！！！！」

『プット！テイラ〜ノ！ザウル〜ス！！』

オーズ「よし、行くぞ！！」 ゲキレッツアタック
ジョーカー「行くぜ照井！！！！」 ゲキレッツアタック
響「おお！ゲキレッツライダーラッシュだ！！」
嵩月「。。。」

とりあえず中略…、

映司「。。。」 正座
ケイスケ「。。。」 正座

嵩月「。。。まさかゲキレッツライダーラッシュに負けてグレゲキ喰ら
つて…拳句の果てには最終ラウンドで負けて必殺喰らって終了です
か…なんとまあ、情けない…。」
つぼみ「てめえら真面目にやっつてんのか？こちとら遊びじゃねえん
だよコラ？わかつてんのか、ああん？」
映司ケイスケ「い、いやコレあそび、」

嵩月バース「黙れ。」

コア『……………やっぱごつちいいいいいいいいいいいい！！！！！！』
『アイン側にコアビーム』

ダークキバ&カリス『ごつて、ええ！？ぎゃああああああああああああああ！！！！！！』
『後衛消滅』

アインハルト『何でー！ー！ー！？』
コア『あいつ等怖いもん！！！！また蹴られるもん！！！！痛いのだもん！！！！！！』

アインハルト『うわっ、全然可愛く無い！！！！』

オーズ『ええ…つと…いいのかな…？』
グレゲキ+必殺

ダブル『…んじゃ、これで終了つと。』

オトヤ『』

ハジメ『ふう…間一髪で近くにいいディエンドが落ちていて助かった…。』

アインハルト『うう…グス…ひつく…。』

オトヤ『…アイン、ごめん…。』

アインハルト『…本当に…オトヤ君とハジメさんが無事で…ひつく…良かったです…。』

ハジメ『あー…ありがとう、ストラトス。』

オトヤ『ご心配を…おかけしました。』

いつき『うんうん、雨降って地固まる！！だね』

映司『もしかして狙ってやった？』

【ラウンド1】

デイケイド「おい海東、お前いつまで死んでるつもりだ？」

デイエンド「」

マーベラス「派手にやるぜ！！」 訳：頑張ったらバーコードの生
写真くれてやる。」

デイエンド「めっちゃ頑張る。」

凱「変態とお知り合いになってしまったああああああああああ
ああああ！！！！！！！！！！」

オーズ タトバ「あー…なんで俺今回こんな…いじめ？ねえコレ
いじめ？」

バース「まあ、そんな氣い落とすなって火野、オーズ最終回と同じ
日にオズクラ復活するんだから、それまで我慢しろ。」

オーズ「あー、はいはい…。わかりましたよ…。んじゃ、行きます
よ伊達さん！！！！」

バース「おう！！！！」

後藤「伊達さんかつこいいいいいいいいいいいいいいいいいい
い！！！！！！！！！！」

えりか「バース超かつこいいいいいいいいいいいいいいいいいい
いい！！！！！！！！！！」

バース「はっはっは！ありがとよ後藤ちゃん！えりかちゃん！んじ
やあ、いっちょ決めますか！！」

【ラウンド2】

オーズ「ラウンド1は俺達のゲキレッツ…次のメダルチェンジが勝負の分かれ目か…。えりかちゃん、ここは無難にプトティラを。」

後藤「ま、待て火野!!!ここに…ここにサソリのセルメダルが3枚ある!!!これで戦ってくれ!!!頼む!!!」

オーズ「いや、それコンボチェンジできないし…。」

えりか「映司さん!!!お願いします!!!貴方だってバースでしょう!?!」

オーズ「いいえオーズです。」

バース「まあまあ2人とも落ち着けて。自分の価値観火野に押し付けるんじゃないね…。コイツにはコイツの、お前等にはお前等の考え方の違いってもんがあるだろ?ここは火野の意思を尊重しようぜ?」

後藤えりか「伊達さんは最高です!!!!!!!もう伊達さんだけいいです!!!!!!!」

オーズ「今回の俺扱い酷い!!!!!!!」

マーベラス「派手に行くぜ!!!!!!!」

凱「お知り合いになった人達が非常にめんどくさかったぞ!!!!!!!」

デイエンド「土の写真はいつ貰えるんだい?」

オーズ「よし!行くぞ!!!」 紫

バース「さあて、行きますか!!!」

デイエンド「土の生写真ゲッツ!!!」

デイケイド「海東は後で個人的に漬す。」

オーズ「はあ!!!」 ゲキレッツ

デイケイド「ふん!!!」 ゲキレッツ

後藤えりか「伊達さんパワああああああああああああああああああああああああああああ!!!!!!!」
ただのボ
タン連打

嵩月「私もです、また一緒に制裁しましょうね！」

つばみ「はい！」

響「うん、まずその言葉がおかしい事に気付こうか？」

奏「響響、そういう事言うのやめようか、うん。」

アインハルト「あの…いつきさん、ありがとうございました…。」

いつき「うん、こちらこそ。これからもオトヤ君達と仲良くね。」

アインハルト「あ、はい！あつ、そうだ…お昼にお弁当作ったので、皆さんで召し上がってください。」

映司「うん、とっても楽しかったね！」 とてもすっきりした顔

士「」

海東「」

翔太郎「」

フィリップ「」

照井「」 本日の映司のストレス発散用の方々

後藤「えりかちゃん…最後に…君にいい事がある。」

えりか「うん？何、後藤ちゃん？」

後藤「伊達さんがバースだ!!!!!!!!!!!!!!」

えりか「同意!!!!!!!!!!!!!!」

その頃…、

朱湮「っていつか…ゆり、アンタコラボ行かなくて良かったの？」
ゆり「ええ、こっちで朱湮と遊んでる方が楽しいわ。」 現在仲間
放置で朱湮とシヨッピング満喫中

パース3（実質的初代パース信長）：正直ガンバライド目的で集めたメダルの全
キュアノアさんことツカサさん、ありがとうございました。

今回は番外編かもしれない!!!

士「ここは…何の世界だ？」

我流「我流と申します、初めまして…こちらの次元の仮面ライダー
ディケイド。」

映司「え？か、仮面ライダー…!?!？」

レイジ「あ、あれ？ここどこ？」

翔太郎「行くぜ、相棒…。」

士・映司・翔太郎・フィリップ・我流「…」「…」変身ッッ!!!「…」
「…」

我流「ここは…【クロガネの世界】です。」

番外編：我流とクロガネとWクライン

これで決まりか!?!?

来訪するD / 我琉とクロガネとWクライン 前編（前書き）

操緒「復活後初の番外編だー!!」

智春「しかも今回はコラボ番外編だね。」

翔太郎「ああ、前スピノフでコラボ予定だったツリーさんのコ
ラボだ。」

フィリップ「興味深い…ゾクゾクするねえ…。」

士「俺も初登場だ。」

ユウスケ「それじゃあ本編をどうぞ!」

士「おいユウスケ、俺の台詞とるん、」

ユウスケ「あ?」

士「ごめんなちゃい。」

来訪するD / 我琉とクロガネとWクライン 前編

深夜0時…誰もが寝静まったこの時間、とある街に、謎の現象が発生した。

1つの教会を中心に辺りが銀色に染まり、ヴオオンという音と共に、世界が歪み出したのだ。

現在この教会の住人はとある事情で出かけており留守、…ゴゴゴという音が教会から鳴り響くと、辺りを包んでいた銀色のオーロラが消えた。

すると教会の外見が若干変わっており、扉がガチャリと開くと…そこから、マゼンタ色のトイカメラを首からぶら提げた紺色のスーツのメガネのパーマ男が姿を現した。

「おっ？土、今回の格好は何だそれ？」

「スーツ…サラリーマンですかね？」

「それは海東のところでもうやっただろ。それにしても…俺はどんな格好をしても似合ってしまうな…!!」

男に続き、教会から姿を現す若い青年と女性。

2人に言われて男は自分の格好を見直す…とりあえず、似合っている事は違いない。

だがしかし、男と一緒に出てきた2人組みは何故かクククと笑っていた。

別に格好を笑っているわけではない…彼のこのナルシストぶりを笑っていたのだ。

「全く…お前等、毎度毎度この門矢士様の華麗なファッションを見られる事を光栄に思えって言ってるだろ？」

「はいはい、ありがとうございました土様。」

「ユウスケ、顔笑ってますよ。」

まず、このスーツの男…名は門矢士。

かつて『世界の破壊者』と呼ばれた青年であり…仮面ライダーディケイドと呼ばれる謎の仮面ライダーに変身する力を持っている。

彼の目的は『自分の世界』を探す為であり、数々の仮面ライダーの世界を訪れ、その結果『旅その物が自分の世界』だと気づき、自分の生まれの世界が見つかった今でもこうして世界を巡っている。

その仲間である、お調子者の青年が小野寺ユウスケ。

彼は『クウガの世界』の仮面ライダーであり、士が始めて訪れたライダー世界の仮面ライダー。

世界中の皆の笑顔を守る為、士に同行している。

その隣にいるのは光夏海。

士が最初に訪れた世界で彼を拾ってくれた人物で、彼女自身も仮面ライダーになれる。

先程の銀色のオーロラも彼らの仕業。

彼らが世界を移動すると彼らの根城である『光写真館』は銀色のオーロラに包まれ、写真館ごと世界を渡るのだ。

そうした場合、写真館の元となった行き先の世界の建物は写真館に融合する。

つまり…今彼らが出てきた教会、すでに中は写真館と化しているのだ。

だが当の彼らはそんな事気にしない……ていうかもう慣れた。

いや、慣れたら慣れたらで色々と問題が…しかし、それでも気にしないのが破壊者クオリティである。

とりあえず教会…もとい写真館の中に戻る士、ユウスケ、夏海の3人。

夜中であるにも関わらずこの写真館の主で夏海の祖父…光栄次郎は3人分のコーヒーを淹れてくれていた。

「おじいちゃん、夜中にコーヒーはダメですよ？」

「およ？あちゃー、ついついいつもの癖でねえ…。」

「何だ？とうとうボケたかジイさん？」

「おいおい土、そう言う言い方無いだろ？」

「土君……。」

栄次郎を馬鹿にしている土の背後に忍び寄る魔の手…。

その正体である夏海は右手の親指を立てると、土の首元に構えた。

「光家秘伝！！！笑いのツボ！！！」

グサツ！！！！

「…プ…アツハツハツハツハハハハハハ！！！！！！お、おい夏ミカン…夜中に笑いのツボは止める！！！！アハハハハハハ！！！！！！」

夏海の必殺技：『笑いのツボ』

恐らく全世界最強の奥義であり、どんな者でも容赦無く笑わせる事が出来る。

「お…恐ろしい…。」

「我が孫ながら、いや天晴れ天晴れ。」

『栄ちゃんそこ笑い何処？』

「いやはや、なんとも凄い技ですね。是非とも僕も御教授願いたいものです。」

「お前等カハツカハツ！！わ、笑うなツハツハツハツハ！！！！」

「一番笑っているのはあなたですよ土さん。」

「う、うるさい……ん？」

「……？」

何故だろう…今、全員の動きが固まった。

土も、夏海も、ユウスケも、キバーラも、謎の男も……栄次郎のみ

が平常運行中。
謎の男？

「あ、どうもお邪魔してます。」

「「「お前誰だ（ですか）あああああああああ！！！！」
アンタ・アナタ
！！！！」

思わず、全員でハモツてしまった。

そりゃそうだ……この写真館のメンバーは本来、滅多に姿を見せない海東大樹を除いて全部で4人＋キバーラしかない。

にも関わらず、何故かこの場に……誰にも見覚えが無い……謎の青年が……。

身長は土ぐらいだろうか？

顔は結構優しそうな感じで、大人っぽい。

全体的に落ち着いていた雰囲気醸し出している、謎の青年。

一体何時から……そう思っていると、青年は椅子から立ち上がり、襟を正した。

思わず、土はそれに身構える。

「初めまして仮面ライダーディケイド……門矢士。僕は我琉智と申します。以後、お見知りおきを。」

「我琉……だと……？」

突然現れた謎の青年……我琉は礼儀正しそうに土に頭を下げると、写

真館の出入り口に差し掛かった。

ドアノブを握ると、さらに土の手を掴む。

「何のマネだ？」

「僕はこの世界でのアナタの案内役です。ご案内しますよ、この世界のライダーの下へ。」

「……………お前…何者だ…？」

「…行きましょう。」

そう言うと我疏は有無を言わず、土の手を引っ張った。

外見に似合わず力が強く、土も抵抗できずにそのまま引きずられる。

「おっ、おい！！」

「小野寺ユウスケさん、光夏海さん、アナタ方も一緒にどうですか？」

「人の話を聞け！！おい！！！！」

その頃…、教会（写真館）から数キロ離れた港

「フィリップ！！行くぞ！！」

「ああ！！」

『トモ！！私達も！！』

「うん、行こう操緒！！」

1人の男、2人の少年、そして1人の少女は深夜にも関わらず、街中を走り回っていた。

目的地はこの先の港…男が手に握る一枚の手紙に書かれている住所だ。

まだ目的地は先にも関わらず、すでにそちらの方から物凄い爆音が

聞こえる。

4人は到着すると、そこで暴れている謎の影の前に立った。謎の影の正体はまるで鬼の様な姿を持った怪物……『使い魔^{ドクター}』彼らはその前に立つと、男は赤いベルトを腰に巻きつける。すると背の高い方の少年にも同じベルトが出現し、2人は懐から1本ずつUSBメモリの様な物を取り出した。

『サイクロン！』

少年… フィリップの方は『風の記憶』を内包した緑色のガイアメモリ… 『サイクロンメモリ』

『ジョーカー！！』

男… 左翔太郎は『切り札の記憶』を内包した黒いガイアメモリ… 『ジョーカーメモリ』

更に彼らの隣ではもう1人の少年… 夏目智春が少女、
と言うか幽霊の幼馴染… 水無神操緒に呼びかけ、彼女は姿を消す。

智春の影が4メートルぐらいまで伸びると、3人は声を揃え、叫んだ。

「「変身！！！」」

「来い！！黒鐵！！！！！」

『サイクロン！ジョーカー！！』

『闇より暗き深遠より出でし…其は、科学の光が落とす影…』

来訪するD / 我琉とクロガネとWクライン

我琉に連れられて港へとやって来たデイケイド一行。
そこで彼らが見たものは…鬼の様な怪物と、2色の仮面ライダーが
戦っているという光景。

更に彼らの後ろには黒いロボットの様な物も一緒に戦っており、今
までの世界とは一味違った戦いが繰り広げられていた。

それ（主にロボット）に思わず絶句するユウスケと夏海…しかし、
士と我琉はそれを冷静に眺めていた。

「あれは？」

「アスラ・マキナ機巧魔神…この世界、『本来』の力です。愛しい少女の魂を生贄
にして動く、機械仕掛けの悪魔の人形…。」

「なんとまあ、悪趣味だな…。で？あの仮面ライダー…ダブルじゃ
無いのか？という事はここは『ダブルの世界』か？」

「まあ、だいたいあってますね。ほら、あの方々ピンチですよ。行

「つて下さい。」

「お前は行かないのか…まあいい。じゃあ、いつちよやってくるか。」

「そう言うと、土は懐から白いバツクル…『ディケイドライバ-』を取り出した。

それを腰に当てると、バツクルからベルトが出現して彼に巻きつく。更に腰に出現した本状の機械『ライドブツカー』を開き、カードを一枚取り出すと、土はバツクルを開いてカードを前へと突き出した。

「変身！」

『カメンライド ディケイド』

カードをディケイドドライバーへ挿入し、バツクルを閉じると、土の周りにとある仮面ライダーの影が10つ出現。

それらは一斉に土に重なり、彼の姿を『破壊者』と呼ばれる仮面ライダーへと変えた。

仮面ライダーディケイドだ。

バーコードをモチーフにしたマゼンタ色のボディを持つその容姿は、他の仮面ライダー達とはまた違う雰囲気醸し出している。

彼はライドブツカーをソードモードにし、刃を左手で撫でるとツカツカと怪物の元へと歩いていった。

「さてと…お手並み拝見…ですね。」

口元に手をやり、そう呟く我琉。

そんな彼に気付かず、ディケイドはそのまま飛び上がり、ドウターを後ろから切りつけた。

ドウターは倒れ、ディケイドの姿が仮面ライダー…ダブルと智春の前に。

「？ 『一巡目』…？」

『……翔太郎！！』

「あ？」

ダブルの右目が光ると、右手がデイケイドの後ろを指した。そこには……まだ息のあったドウターが…、

「『デイケイド！！！！』」

「なっ…！！」

「…ッ！」

この事態に反応し、我流は懐に手を入れた。しかし、その前に動いたのは…智春だった。

「行け！！黒鐵！！！！」

彼は自身の機巧魔神：黒鐵へ呼びかけると、黒鐵はその巨大な漆黒の左腕を振り上げ、ドウターへと振り下ろした。

シュバルツシルトの間を纏った一撃はドウターを地面に叩き伏せ、動きを完全に封じた。

その隙にダブルとデイケイドはそれぞれ必殺技の準備に入る。

ダブルはメモリをマキシマムスロットへ…デイケイドは『F A R デイケイド』のカードをデイケイドライバーへ。

『ジヨーカー！！マキシマムドライブ！！』

『ファイナルアタックライド　デイ・デイ・デイ・デイケイド』

「『はあああああ………、』」

「ふっ！！」

ダブルは風で、デイケイドはジャンプして宙へと浮かぶ。続いてデイケイドの前には10枚のカードのヴィジョンが浮かび上がり、デイケイドはそれを潜ってドウターへと突き進んでいく。同じ様に、ダブルも自身の必殺技をドウターへと放った。

「『ジョーカーエクストリーム！！！！』」

「はあああああああ！！！！！！」

『ジョーカーエクストリーム』と『デイメンションキック』だ。

すでに黒鐵とデイケイドにより弱りきっているドウターだ…当然、これを避ける事も、耐える事も出来ない。

成す術無くドウターは爆発…今度こそ完全に消滅した。

その証拠に煙から光る砂の様な物が舞い上がっている…『非在化』だ。

それを確認するとダブルとデイケイドは変身を解き、智春も黒鐵を影へと戻す。

戦っているすぐ傍で倒れていたダブルの右側…フィリップも起き上がり、智春の隣に操緒も出現。

「デイケイド…お前なんで…！？」

「どうやら、今度はこの世界に何かあるらしい。ま、しばらくの間世話になるぞ、ダブル。」

いつもの様に調子の良い事を言っつてその場を凌ごうとする土。
久しぶりに再会した友人（？）と会話をしている彼を無視し、我琉
は彼らの隣にいる少年と少女を見つけていた。

（成る程…ここは、『クロガネの世界』…というわけですね…。）

続く…

来訪するD / 我琉とクロガネとWクライン 前編（後書き）

士「というわけで、ツリーさんのところから我琉が来てくれた。」

我琉「どうも皆さん、我琉智です。以後、お見知りおきを。」

夏海「すいません我琉さん、コラボ前に爆散して…。」

ユウスケ「夏海ちゃん自重。」

我琉「いえいえ、大丈夫ですよ。それより…『アレ』は？」

オトヤ「orz」

映司「orz」

士「気にするな、出番無くて落ち込んでるだけだ。」

我琉「…そうですか…。」

後藤「気にするな火野、たった数話だ…38話も先延ばしにされた奴に比べたら何てことは無い。」

ハジメ「登、どっかのカリスなんか最近噛ませばっかなんだ。お前はまだ良い方だ。」

映オト「何か心の底からごめんなさい。」

来訪するD / 我琉とクロガネとWクライン 中編1 (前書き)

士「やはり4部構成か…。」

我琉「僕は出番があればあるほどいいです。」

後藤「何故…俺は出ていないんだ…!?!」

ドクターをダブル、智春と共に倒したデイケイドこと門矢士。

彼は仲間であるユウスケ、夏海、それと謎の青年 我琉と共に智春に案内されこの町で一番大きく(?)不気味な洋館：『鳴桜邸』へとやって来た。

見るからに不気味なその洋館はあらゆる人を寄せ付けない：いや、寧ろ悪霊すら寄せ付けない：。

あまりにおぞましいその外見に夏海はたじろぎ、ユウスケは子供の様なキラキラした目をし、我琉は耳をほじくり、士は写真を撮影していた。

「プライベートで人の家を撮影するのは失礼だろ？」と翔太郎に注意されると士はなんと面白く無いと言う顔をし、しぶしぶカメラを提げる。

何故か我琉に促されて席につく一同、最初に口を開いたのは：操緒だった。

『貴方達誰…？さっきの…翔太郎さん達と同じ仮面ライダーみたいだったけど…？』

「ああ、俺もライダーだ。それより…人に尋ねる時は自分からってお母さんに教わらなかったか？」

『ムッ！』

「士君失礼じゃ無いですか！私は光夏海です。こっちは門矢士君。」

「俺は小野寺ユウスケ！俺達は世界の崩壊を防ぐ為に、様々な仮面ライダーの世界を渡り歩いているんだ。で、今回はこの世界に来たつてわけ。」

「世界を…？あ、僕は夏目智春です。」

『水無神操緒です！トモの守護霊やってます！』

「『霊！？』」

操緒の一言により、夏海とユウスケに衝撃が走った。

当然と言えば当然かもしれない…何せ『霊』だ…。

先程から妙に色素が薄くてフワフワ（そのままの意味で）した娘だなあとは思ってはいたが…。

取り乱している2人に対し、士と我琉はさすがというか…至って平静だ。

「そついや俺達もまだちゃんした紹介してなかったな。俺は左翔太郎だ。」

「僕はフィリップ、よろしくデイケイド。」

「門矢士だ、今後はこつちの名で呼んでもらおうか？で…なんでお前等ここにいるんだよ？」

そう、それこそが士が聞きたかった一番の理由。

共闘した時、どう見てもダブルに世界を渡る力があつたとはどうしても思えなかった。

ガイアメモリは確かに未知のアイテムではあるが、世界を渡るなんて『地球の記憶』には無いはず。

もしあればフィリップが検索して帰る事が出来るだろうが…風都をこよなく愛する翔太郎が好んでここに居座るとは思えない。

であればここに理由としては、『突発的な何かに巻き込まれ、意図せずここに飛ばされた可能性』が一番高い。

「ああ…実は、俺達が風都でドーパントを倒してすぐ、変な腕に掴まれてここに連れてこられたんだ。」

「鋼色の巨大な腕…十中八九『機巧魔神』^{アスラ・マキナ}だと思っけどね。」

「その、機巧魔神って奴は何なんだ？この我琉とかいう奴の話によれば…『大事な人間を生贄にして動く機械人形』…と言うらしいが？」

「ああ、はい。機巧魔神というのはですね…。」

士の疑問に答えるのは智春。

彼も詳しい事は知らないが、多分この中では一番機巧魔神については詳しいだろう。

我琉が何処まで何を知っているかは誰も知らないが…。

アスラ・マキナ
機巧魔神：それは悪魔の機械人形。

愛しい少女の魂と引き換えに、使用者に世界の理を司る『悪魔の力』
を与える事の出来る未知の機械生命体。

封印された少女は『ベリアル・ドール副葬処女』と呼ばれ、封印後は幽霊の様な姿を
した『射影体』として機巧魔神使用者に寄り添う事になる、操緒が
該当するのはコレ。

一方智春の様な使用者は『ハンドラー演操者』と言い、機巧魔神を現世に呼び
出したり、魂をリンクさせて操ったりする事が出来る。

この世界には人間とは別に『悪魔』という人種が存在し、見た目は
普通の人間と変わらないがそれぞれ固有の特殊能力を得ている。

人間と悪魔が契約する事で『ドクター使い魔』が生まれ、機巧魔神とは相反
する力を持つ。

しかし稀に機巧魔神と使い魔両方を所持する者がおり、その者は演
操者から限り無く神に近い存在へと昇華した者『アスラクライン魔神相剋者』と呼
ばれている。

魔神相剋者は魔力を無限に増幅する事が出来、まさに最強にして究
極の存在とも言える。

「……と、まあ僕が知ってるのはこれぐらいですかね…？理解して
いただけましたか？」

「えっと……俺はちょっとぶっ飛んだ話すぎて……夏海ちゃんは
？」

「私も少し…土君はいつも通り『だいたいわかった』ですか？」

「いや…完璧だ！」
いつも通り自信満々に言っている土…本当に理解しているのか怪し
い所だ。

一方で我琉は完全に理解しているっぽい…というか元々知ってそう

で怖い。

「成る程、問題は…土さん、アナタがここで何をすべきなのか…です
すね。」

「わかってる。まっ、この格好が何かの手掛かりになるだろ？」
といいながら自分のスーツの襟を引っ張る。

これまでも土は世界を変えることに、自動的に服装と役割が変わっ
てきた。

そしてその役割からその世界でやるべき事が判明するパターンがほ
とんど。

ゴソゴソとポケットを浅くって見ると、彼はそこから一枚の免許証
の様な物を発見。

『成る程』と言い、今日のところは帰ると、ユウスケと夏海を引き
ずって帰って行った。

勿論我琉もその跡をつけていく。

（はてさて…彼は一体、いつになったらこの世界のライダーの存在
に気づくのやら…。）

来訪するD / 我琉とクロガネとWクライン

「痔を患ってしばらく休む事になった柱谷教諭の代理として今日からこのクラスを受け持つ事になった門矢士だ。俺の授業は理解出来ない奴はどんどん置いていくからそのつもりで…よろしく？」

翌日の朝のHRが始まり、智春と操緒とフィリップは思わず口を『カポーンッ！』では無く…ポカーンと開けていた。

周りでは『あの先生カッコいい！』とか『タニやんいつから痔に？』とか『柱谷教諭に、良き終末が訪れる事を』とか『すんばらしいいいいつっつ！！！！！！新しい先生の誕生だよっつ！！！！！！』という声がちらほら上がっているが、この3人だけは『え？何コレドツキリ？』という感じで呆けている。

どうやらこの世界での彼の役割は『1年7組の担任』の様だ。

同時に『洛高の数学教師』でもあるようで、一時限目はそのまま数学で授業開始。

先程の自己紹介どおりで、東京大学並の問題を次々と出題しては分からない生徒をバシバシと置いていつている。

智春含め半数以上の生徒が脱落していく中、嵩月奏、アニア・フォルチュナ、樋口琢磨、フィリップだけはしっかりと付いて来ていた。何気に操緒も少しは理解できる様でところどころ正解している…このクラスパネエ。

ようやく一時限目が終了し、土はチャイムと同時に教室を去る。

教室から出てすぐに彼を迎えたのは…、

「どうですか？この世界の居心地は？」

「我琉……。」

我琉智だった。

どうやら彼もこの世界で役割があるようで、副担任がつける名札を胸元に掲げている。

コイツ本当に何者なのか…そう思いながらも士は彼の質問に答えた。「いいわけあるか。ダブルがいるが…どうやらこの世界は見る限り元々はライダーの世界じゃ無いらしい…。これじゃ、何をすればいいのかさっぱりわからん。」

「甘いですね。」

「何？どういう意味だ？」

「そのままですよ。アナタはこの世界の事を何も理解できていません。この世界の名前…アナタは知ってますか？」

「『二巡目の世界』だろ。昨日夏目が言っていた。」

「正確には違います。」

「ならお前は何の世界か知っているのか？」

そう言うつと我琉は『勿論です』と当然の様に返し、窓の外を眺めながら言った。

「ここは、『クロガネの世界』です。」

「クロガネ？」

聞いた事無い名前だった。

一応士は『世界の破壊者ディケイド』…現在では一号くまでしこまでの全てのライダーの知識を網羅している。

その自分が知らないライダーなどいるはずが無い…そもそも『クロガネ』と言うのはライダーの名前なのだろうか？

そういえば智春の機巧魔神の名が『クロガネ』だった気がするが…。
「ライダーですよ、れっきとした。『仮面ライダークロガネ』…ア
ナタが知らないのも無理はありません。何しろ彼はまだこの世界で
は誕生していませんからね。門矢士さん…：あなたのこの世界での
役割は『仮面ライダークロガネとなるべき人物を守る』事です。」
何というムチャクチャな役目だろう…。

ただでさえ存在を全く知らないライダー…：それになると思われる人
物を守るとは…。

多分我琉が知っているだろうが…：昨日から付き合って見て、コイツ
がそんな事簡単に教えてくれるとは思えない…。

サポートはしてくれるんだろうが…。

「実を言うと、僕もクロガネが誰なのか全くわからないんです。」

「何？」

「機巧魔神がいる世界がクロガネの世界…：という知識はあるのです
が、いかんせんライダー世界の常識から全く外れたライダーですの
でなんと…。」

「…：お前にもそういう人間らしい所があったて安心した…。」
ライダー世界の常識から全く外れている。

我琉が言うには『ライダーでありながらライダーとは言えない存在』
だそうだ。

全く持つてわからない…：しかし、行動しなければ何も始まらず、こ
の世界から永遠に出る事は出来ない。

仕方なく、士は我琉と共にクロガネの変身者（になると思われる人
物）を探す為に校内へと繰り出した。

「ふーん…我琉智か…。アイツが動き出すなんて、この世界には素晴らしいお宝がありそうだ。」

その頃、我等がヒーロー（オールライダー Vivid 的意味で）仮面ライダーディエンドこと海東大樹は洛高を眺めながら帽子を深く被りなおしていた。

その瞬間、目の前の相手から巨大な爪を振り下ろされるが海東はそれを華麗に避け、ディエンドライダーで追撃。

カードポケットから変身用カードを抜き取ると、それを構える。

『返せ……あの子を返せええ……!!』

「どうしてこの世界に『ヤミー』がいるのかは知らないけど…僕の邪魔立てだけは許さないよ。変身。」

『カメンライド ディエンド』

引き金を弾き、海東の姿はシアン色のライダー…ディエンドへと変わる。

新たなカードを3枚抜き取り、ディエンドはヤミーの攻撃をかわしながらヤミーの背後を取る。

このヤミーは体中に巨大なギザギザな刃を取り付けた『ノギリヤミー』…何故『オーズの世界』の、それも本来ありえるはずの無い無機物系のヤミーが『クロガネの世界』にいるのか分からないが、彼の目的はお宝なので倒してしまえばそんな理由どうだっていい。

「君の相手は…彼らにお任せするよ。」

『カメンライド スカル コア ナデシコ』

3枚のカードをディエンドライダーに装填し、ノコギリヤミー目掛けて引き金を弾く。

すると銃口から3つの影が出現し、それらは徐々に形を整えて最終的に3人の仮面ライダーとなった。

1人は『ダブルの世界』最初のライダー：仮面ライダーズカル

2人目は『オーズの世界』と『ダブルの世界』両方の力を持つ巨大な炎の怪物：仮面ライダーコア

3人目は『フォーゼの世界』の女性ライダーであり、唯一の女子高生ライダーである仮面ライダーなでしこ。

『アタックライド クロスアタック』

「それじゃ、君らと遊んでいてくれ。じゃね」
そう言って立ち去っていくディエンド。

ノコギリヤミーは彼を追いかけようとするが、すぐにコアに阻まれてしまう。

そして、スカルとなでしこの必殺技がノコギリヤミーへと襲い掛かった。

『スカル！マキシマムドライブ！！』

『ロ・ケ・ツ・トノオ・ン ロ・ケ・ツ・トノリミットブレイク』

放課後になり、智春、操緒、嵩月、アニア、フィリップの5人は一階の端の部屋へと向かった。その部屋の扉には『科学部』と記されており、智春と操緒は少し深い溜息をつきその戸を潜る。中には背の高い少女がおり、彼女は『はい』と手を振ると席を立った。

「お疲れ様皆。」

「こんにちは朱涅さん。」

彼女の名は黒崎朱涅。

この科学部の部長代理（簡単に言えば副部長）であり、ある意味この学園一のトラブルメーカー。

一見普通の少女だが、その実中身はとんでも無い事になっており、体中の半分以上が機巧化されている機巧化少女。

本人曰く、『顔と胸は自前』らしい。

ちなみに最近翔太郎と良い感じの雰囲気になっている…主に上下関係的な意味で。

なんだか寝不足な様子で少しうとうとしていた。

「どうしたんですか朱涅さん？寝不足ですか？」

「ん〜…まあね。実は昨日、あたしん家何故か写真館っぽくなつたのよねえ…。」

「『『『』は？』『』『』」

またわけのわからない事をおっしゃる先輩だ。

家が写真館？確か彼女の家は教会だったはず。

教会が一日で写真館になるはずなどあるわけが無い。

だが、仮にそれが真実だとしたら昨日彼女はどこで寝たのだろうか？

「ん？サオちゃんの実家だけど？」

『ええ！？わ、私の家！？不法進入ですか朱湮さん！？』
「失礼ねえ、ちゃんと許可取ったわよ。」
『誰に！？』

「私です」

そう言つて、部屋のロッカーが開かれた。
そこから出てきたのは……女性。

白いブラウスにオレンジ色のスカート、そして……灰色のアステカのお面。

アステカのお面？

「何じゃこりやあああ！！？？」

「興味深い！！ゾクゾクするねえ！！」

「う……うわあ……」

「……バカか……」

「あれ？不評？」

アステカの女性は不満げに腕を組み、首を傾げた。

その姿を見て朱湮は頭を抱え、操緒はパクパクと口を開ける。

ゆっくりとお面を取ると……そこから、操緒そっくりの女性が姿を現した。

そっくりというか、もはや操緒そのもの。

似てる以上似ている彼女の顔を見て、操緒は思わず声を上げてしまった。

『お姉ちゃん!?!』

「はい操緒ー!元氣してたー?」

操緒に似た女性、水無神環緒は操緒と同じ笑みを浮かべるとアステカのお面を操緒に差し出してきた。

『お姉ちゃんなんでここにいるのよ!』

「ん〜何でと言われてもねえ…?」

突然部屋に現れた生きてる操緒…じゃなくて、その姉の水無神環緒。彼女は普段は知的でクールな印象の表情をしているが、笑った顔は操緒そのもの。

懐かし顔に智春と操緒は驚愕しっぱなし…なにせ彼女、本当なら今頃イギリスだ。

操緒が行方不明になった時に少し帰ってきて大いに泣きわめき、その後『泣いてばっかじゃ操緒に怒られる』と言って再び両親とイギリスに旅立ったはず。

それが何故…ここにいる…?

「あの…環緒さん…?何でここに…?」

「ん?あー、私この生徒だったし。知ってる先生まだいたから『操緒どこ?』って聞いたら教えてくれた!」

「そうじゃなくて!何で日本にいるんですか!?だいたい何で操緒の事…!?!」

「何言ってるのよ?トモ君が教えてくれたんでしょ?メールで。」

「はあ!?!」

驚きのあまり、素っ頓狂な声を上げてしまった。

勿論智春にそんな覚えは無い…そんな面倒くさくなる様な事する訳が無い。

アニアとかフィリップは環緒を知らないし…翔太郎にそんないたずら出来る様な頭があるとは思えない。

嵩月…?彼女がするわけない。

となれば犯人はただ1人…、

「……………操緒？」

『えへへえ……………ゴメンなさい……………』

このお馬鹿幽霊だけだ。

多分智春が寝てる時にでも憑依して勝手にメールしたんだろう。そりゃ家族と連絡取りたいのはわかる……………でもどうせなら生き返ってからやってほしい。

「サオちゃんの実のお姉さん……………興味深い！ゾクゾクするねえ……………！」

「あら？もしかして僕……………私に惚れちゃった？」

「へ？」

「残念ね……………私年下は興味無いんだな……………これが。告白するんなら、もう少し大きくなってか・ら・ね」

「はあ……………なんかすいません……………」

（ ）（ ）（あのフィリップがいとも簡単に！？）（ ）（ ）

何という女だ……………底知れない。

環緒は顔色の悪い朱湊の肩を抱くと、彼女の頭をぐりぐりと回す。

「昨日この朱湊ちゃんが写真館の前で困ってたところを私が天使の如く救いの手を差し伸べてあげたわけよ……………最初私の事操緒と思ってたみたいだけど……………。この子の作った料理美味しかったわ……………！」

「黒崎朱湊でも勝てないなんて……………水無神環緒……………これは新しい研究对象だ……………」

ゴクリと唾を飲むフィリップ、『どうして私が……………こんな辱めを……………。』となっっている朱湊。

科学部の部室は未知の生命体（環緒）を招き入れた事で……いつもよりも一層力オスが増していた…。

「おい、本当にこの学校にクロガネがいるのか？」

「ええ、間違い無いでしょう。」

我硫は胸を張りながら土にそう断言した。

彼だってクロガネの正体は知らないはずなのに一体どこからそんな自信が湧きあがるのか…不思議で堪らない…。

とりあえず2人は今日の業務は終了したのでこの世界の事を深く知る為、智春達が在籍している『科学部』の部室へと向かう際中。

この世界の事を探るには機巧魔神を駆る彼等の傍にいた方が効率が良いからだ。

すっかり帰り支度をしていつものスタイルに戻った土と我硫が廊下を歩いていると目の前に……、

「やあ、土。」

「海東…？何だお前、また何か盗んできたのか？」

突然窓から海東大樹が姿を現した。

トレジャーハンターを生業にしている彼は世界中のお宝を探し集める為基本的には土達とは別行動中。

彼は土に『遅かったね』と皮肉気に言うと、隣にいる我硫に目を向

けた。

「君が我硫智か……会うのは初めてかな？」

「ええ、仮面ライダーディエンドこと海東大樹。ところであなた……今まで戦ってましたね？」

「さすがだね、その通り……ヤミーと交戦したばかりさ。」

「ヤミーだと？」

その言葉に反応したのは士だった。

『ヤミー』とは本来、『オーズの世界』に存在している『グリード』と呼ばれるメダルの怪人により生み出された存在。

それが異世界……それもダブルが関わっている様な世界に何故いるのだろうか？

また海東のハツタリ……とも考えたが我硫の表情から察するにどうやら冗談では無さそうだ。

「どついう事だ海東？この世界に何故ヤミーが？」

「フフン それはね……、」

「この世界は『二巡目の世界』は、『ダブル』と『オーズ』の二つの世界が入り混じった世界なのさ。」

「何……？」
入り混じった世界とは何の事だろうか？

以前二回目に【キバの世界】に行った時はワタル達仮面ライダーの他に『魔導士』とかいうわけのわからないコスプレ連中がいたのと

同じ事なのだろうか？

それを自慢げに語る海東に対し、我硫は『ほう？』と顎を撫でた。

「ずいぶんと調べてますね海東大樹……貴方のこの世界での狙いは何ですか？」

「それはもちろん、『機巧魔神』さ。それもただの機巧魔神じゃあ無い……最強と名高い『鋼』の機巧魔神……その祭壇さ。」

「イクストラクタというわけですね……残念ながらそれは不可能ですよ。何しろあれは……、」

「夏目直貴がすでに使っているから？」

「……本当に……憎たらしいほど調べている……さすがです。」

「まあね。」

海東と我硫の話にさっぱり着いていけない士。

もう正直ヤミーなんかどうでもいいのでさっさとクロガネを見つけてこの世界とおさらばしたかった。

だってもうこの世界わけわかんないんだもん。

その時……、

バリーイイイイイインン！！！！！！

「！！！！」

「今のは……？」

突然、校舎の窓ガラスが激しくぶち破られる音が鳴り響いた。

それに驚き振り返る土、海東、我硫。
更に部室から出てきた智春達。

その後ろにはもちろん、環緒も一緒。

「門矢先生!!」

「夏目か……それにフィリップ、多分怪人だ。いくぞ!」

「怪人? ドーパントはいないはずだし……興味深い、行こう!」

智春、フィリップを引き連れて走っていく土。

朱湮や嵩月も険しい顔をしているが環緒だけは相変わらず『何々? どうしたの?』的なマイペースな表情を浮かべており、緊張感が全く感じられない。

とりあえず三人（操緒含めて四人）を追う事になり、海東と我硫もそれを追って行った。

『うう……!』

その頃、ノコギリヤミーは1年7組の教室を隅々まで探っていた。

『いない』、『どこにもいない』と何度も繰り返しながらグルグルと動き回り、腕のノコギリで机や教壇を切り裂いていく。

……にも関わらず、

チャリン…チャリン…チャリン…!

体の中のセルメダルは増える一方。

一体どんな欲望から生まれているのか……そうこうしていると……、

「いきました！」

智春の声が聞こえた。

彼と共に駆けつけた来た士やフィリップ。

それに科学部の面々だ。

後ろにはもちろん我硫や海東、環緒もあり、士とフィリップは並び立つ。

「あの怪物…前に風都にいた奴とそっくりだ…！」

「あれは『ヤミー』…仮面ライダーオーズの世界の怪人だ…。フィリップ、お前左と連絡は？」

「ばっちりさ。」

見るとフィリップの腰にはすでにダブルドライバーが巻かれており、すでにジョーカーメモリセット済み。

翔太郎本当にご苦労様である。

あとはファングを呼ぶだけ…その為にフィリップはノコギリヤミーへと突進を仕掛け、相手を突き飛ばした。

窓ガラスにぶち当たり破片が舞い…それからフィリップを守るためにファングがどこからともなく出現。

それをすぐに掴んでメモリモードにすると、フィリップは再び士と並んで2人で叫んだ。

『ファング…！』

「変身…！」

『ファング…！ジョーカー…！』

『カメンライド デイクライド』

2人はそれぞれのベルトの力で仮面ライダーダブル ファングジョーカーと仮面ライダーデイクライドへと変身。

先ほどフィリップが突き落としたノコギリヤミーを追い、2人とも窓から飛び降り…その勢いに任せてノコギリヤミーにパンチを浴びせた。

『ぐう！？』

「無機物系か…見た事無い種類だが、だいたい何とかなるだろう…行くぞフィリップ、左。」

『つたく…本当にいろいろあるねえこの学校は…。』

「行くよ、翔太郎。さあ…。」

「『お前の罪を数えろ！』』」

ファングジョーカー風にお決まりのセリフを言うと、ダブルとデイクライドは2人掛かりでノコギリヤミーと戦い始めた。

ライドブツカーとファングの爪…強力な武器を何度も浴びせているにもかかわらずノコギリヤミーは余裕の表情。

「…というか全く効かない。」

あまりにも硬すぎるその体に、2人とも弾かれてしまい地面を転がった。

『んっだよアイツ！無茶苦茶かつて〜…！』

「どうやら奴の体は地球上の物質では無さそうだ…非常に興味深い…が、今はそれどころでは無いね。」

「ああ…一気に決めるぞ2人とも…！」

『ファイナルフォームライド　ダ・ダ・ダ・ダブル』

デイケイドライバーに『緑と黒の2人のダブル』が刻まれたカードを挿入し、電子音声を鳴らすデイケイド。

すると彼はダブルの後ろに回り込み…あるう事か、彼らの背中に手を突っ込んだ。

そしてセントラルパーテーションを中心に彼らを真つ二つに裂き…

…、

『ファング！ファング！！』

『ジョーカー！ジョーカー！！』

ダブルを2人に分裂させた。

これがダブルのFFR形態…『Wダブル』だ。

2人で1人のライダーであるダブルを2人に分裂させる事が出来る…形態は問わない。

これにより生まれた白い野性的なダブル…フィリップの意思を宿した『ファングファング』と、黒い戦士的なダブル…翔太朗の意思を宿した『ジョーカージョーカー』。

デイケイドは2人の間に立つと、パンパンと手を叩く。

「またコイツか…おい門矢、コレ地味にいてえんだぞ？」

「落ち着きたまえよ翔太朗、今はそんな場合ではない。」

「行くぞ。」

ジョーカージョーカーを無視し、デイケイドは必殺カードを、ファングファングはファングメモリのタクティカルホーンに指を掛けた。

何となく腑に落ちないジョーカージョーカーだが、ここは彼らに従い左側のジョーカーメモリを抜き取り、マキシマムスロットへ。そして…、

『ファイナルアタックライド デイ・デイ・デイ・デイケイド』

『ジョーカー！！マキシマムドライブ！！』

『フアング！！マキシマムドライブ！！』

3つの電子音が鳴り響き、飛び上がる3人。

デイケイドは『デイメンションキック』を、ジョーカージョーカーは『ジョーカーエクストリーム』を、そしてフアングフアングは『フアングストライザー』をノギリヤミーへと放った。

鋭い3つの攻撃が直撃し、校庭に爆音が鳴り響く。

さすがにこれには耐え切れなだらう…そう確信した3人だが…、

『フンっ！！！！』

「っなっ！？」

何と、爆炎の中からノギリヤミーが腕を伸ばし、2人のダブルを掴んで地面に叩きつけた。

ほぼ無傷で出てきたソイツはフフフと笑いながら、じりじりとデイケイドとの距離を縮めていく。

「その声…我硫か…？」

「ええ、そうです。仮面ライダーディブレイク…これが僕のもう一つの顔です。」

「やはりライダーだったか…俺に似てるが？」

「気のせいでしょう。それよりも…来ますよ。」

ノコギリヤミーが再び立ち上がり、ディケイド達へと襲いかかってきた。

巨大なノコギリの腕を振り上げ、ディケイド、ディブレイク、ダブルへ走ってくるノコギリヤミー。

しかし、ディブレイクはそれを冷静に見据え…、腰に下げた専用銃

『ディブレイクガン』を構えた。

ゆっくりと引き金を弾き、ノコギリヤミーの足元を狙う。

「はっ…！」

バババババン…！！

一瞬怯んだノコギリヤミー…するとディブレイクは素早くカードを手に取り、それをベルト『ディブレイクドライバー』へと挿入。

『カメンライド ヒビキ』

全身を紫色の炎が包み込み、ディブレイクはその姿を仮面ライダー響鬼と同じ姿…『DBK響鬼』へと変身を遂げた。

「ライダーへの変身も可能だと!？」

「ええ、それが僕…ディブレイクの力です。ふんっ…！」

響鬼の怪力はライダー随一…それでノコギリヤミーを押しつけ、なんとそのまま持ち上げて地面に筋肉 ライバーよろしく叩きつけた。

パンパンと手を払い、更に新たなカードをベルトへと挿入。

『カメンライド カブト』

今度は仮面ライダーカブトの力を得た『DBKカブト』へと変身。
ノコギリヤミーが地面に突き刺さっている今がチャンス…そう考えたDBKカブトはベルトに必殺技用のカードを挿入して準備態勢に。

『ファイナルアタックライド カ・カ・カ・カブト』

「邪魔です！どこかへ行つてなさい！」

その言葉と同時に…DBKカブトはノコギリヤミーを蹴り飛ばした。
ノコギリヤミーは数十メートル離れた位置まで蹴り飛ばされ、姿を見失ってしまう。

敵がいなくなつた事を確認するとDBKカブトは変身を解いて我疏に戻り、それに合わせてデイケイドとダブルも変身を解いた。

「我疏智…君もライダーだったとはねえ…実に興味深いが…何故今まで手を出さなかったんだい？」

「お手並み拝見つてやつですよ。まあ、今回は少々分が悪かった様ですから手を出してしまいましたかね…僕の役割はあくまで『案内人』なのです。」

「ほう？じゃあその『案内人』とやらに聞こうか？何故オースの世界のヤミー…それも本来ありえないはずの『無機物系』なんかがこのに？」

「先に海東さんも言っていたはずですよ、ここはダブルもオースも混じつた世界だとね。」
何となく腑に落ちない土。

それよりも、と我疏は服の襟下を正しながら言う。

「あのヤミーの親、わかりましたよ。」

「何だと…?」

「あなたですよね……? 水無神環緒さん?」

「……………え?」

窓から外の風景を『何コレ凄い』みたいな目で眺めていた環緒。我疏は彼女を指差しながら、そう言ってニヤリと笑った。

来訪するD / 我硫とクロガネとWクライン 後編

我硫に呼ばれ、土達と科学部部員全員、写真館と化した教会に集められていた。

その中心にいるのは我硫…そして水無神環緒。

朱湮が『私の教会：orz』となっていて、そこをその場に居合わせた夏海が励ましており、写真館の主である栄次郎が全員分のコーヒーを用意してテーブルに置く。

ちなみにユウスケは土が『お前がいたら色々邪魔だ』と追い出した…。

栄次郎に差し出されたコーヒーを一口飲むと、我硫は優しく微笑み環緒に言う。

「それでは水無神環緒さん…聞かせてもらえますか？あなたの欲望を…？」

「……………」

さっきまで本当につるさかった環緒がまるで借りてきた猫の様に大人しい。

先ほどのノコギリヤミー…その生みの親、水無神環緒。

智春や操緒が見守る中…彼女はゆっくりと口を開いた…。

「操緒を……返してもらいたかった……。」

「ほう？」

「あの飛行機事故で死んだ私の妹……私は誰よりも操緒を愛していた……。ううん、私だけじゃない……父さんも母さんも、皆操緒の死を悲しんだ……。でもある日、操緒からメールが届いた。トモ君のアドレスだったけど私にはわかったわ、あれは操緒の言葉だった……。でもそんなはずはない……操緒は死んだんだから……だから私はそれを確かめるために日本にやって来たの。最初にあの子を見つけた時……心の底から嬉しかったわ……。たとえ幽霊でも、まだ私達の手の届くところにいたんですもの……。でも同時に絶望もした……どうして操緒は私たち『家族』じゃなくて、トモ君たち『友達』のところにいるのって……。悔しかった……取り戻したかった……操緒と……また一緒に暮らしたかった……。……。」

これが環緒の欲望。

全員が沈黙する……それはそうだ。

これは『欲望』だとは言わない……家族なら一緒に暮らしたいと思うのは当然の事なのだ。

さすがの我疏も、環緒が親だという事はわかっていてもここまでは想定しておらず、思わず口元を押さえて下を向く。

「成程なあ……そりゃま、そうだよな……。」

「家族と一緒に暮らしたいという願望は僕にもあったよ……でも、まさかその想いがこんな事態を引き起こすとはね……。」

翔太郎とフィリップも環緒の気持ちがよくわかる。

何故なら彼らが戦っていた組織『ミュージアム』はフィリップこと園咲来人の実の家族。

しかも実の父親をこの手で倒しているのだ……。

でも、と環緒がテーブルに手をつきながら立ち上がった。

そんな彼女に全員で注目する。

「でも……まさかあんな怪物が生まれるなんて……！私はただ操緒と会いたかっただけなのに……いろんな人を傷つけて……。」

「という事は、あなたはグリードの顔を見ていないと？」

「ええ……。」

「ま、そんな事だろうとは思ったぜ……。」

呆れ気味に土が言った。

もう彼はとにかく疲れている。

仮面ライダークロガネ………それを探して守る事が今回の任務。

世界の破壊者ですら聞いた事の無いライダーを探すなんて、まるで砂漠の中であつた一つのピースを探すような物。

2人がふうとため息をついていると、今度は智春が立ち上がり環緒の前に。

彼は環緒の前に膝をつく………なんと、深々と頭を下げ土下座した。

「トモ君？」

『ちよっとトモ何やってんの！？』

「……すいませんでした……。」

「え……？」

「僕が情けないばかりに……操緒をこんな目に合わせて……環緒さんやおじさん、おばさんにも辛い思いをさせてしまつて……。みんな僕が悪いんです！皆、環緒さんを責めないで下さい！責めるんなら……僕を……。」

「止めてください夏目君……。」

「そうだけ智春、お前が謝る必要なんてねえ！お前らが巻き込まれた事故は……こう言っちゃ悪いが偶然だ。お前に落ち度なんてねえぞ！！」

嵩月や翔太郎がそう言ってくるが、智春は首を横向きに振る。

操緒は死んではない……機巧魔神の副葬処女として封印されているだけなのだ。

ある意味死ぬよりもひどい……永遠の牢獄に閉じ込められている……それだけだ……。

「それでも僕は環緒さんに謝らなくちゃいけない……僕は怖かったです……。本当は操緒が見えているのにそれを環緒さん達に内緒にしておくことが……ばれるのが……。『言えばきつともっと辛い想いをする』自分にそう言い訳し続けて避け続けて逃げ続けて……でも、それも今日まで。環緒さん、正直に言います……聞いてくれますか？」

それから……智春、操緒、環緒の話は夜まで続いた。
機巧魔神、使い魔、悪魔、はぐれ眷属、洛芦和高校生徒会の正体……

総てを余すことなく。

更に夏の終わりごろでの仮面ライダーダブルとの出会いや、自分達が今巻き込まれている状況について。

勿論彼女は最初信じられないという表情をしていたが、そこはさすが幼馴染…智春が操緒関連で嘘をついた事など一切無い事を知っている環緒は、割とあっさりと言ってくれた。

そして最後に…、

「操緒は僕が必ず救い出します、一生をかけてでも……絶対に……！」

この言葉で、とうとう環緒は泣き崩れてしまった。

最愛の妹が本当は生きている…それなのに会う事が出来ない…。

この智春の言葉が一体どれだけの励みになったか…それは水無神姉妹にしかわからないだろう。

智春と操緒が環緒を慰めている間に、仮面ライダー達は最期のひと仕事。

『ノコギリヤミの撃破』

士の役目とは関係ないが、放っておくわけにもいかない。

士と我硫は立ち上がると、写真館を出ようとする。

そこで智春も…、

「翔太郎さん……依頼してもいいですか……？」

「ああ、わかっているぜ智春……！」

「……ありがとうございます……。」

正式にダブルも参戦。

士、我硫、翔太郎、そしてフィリップは4人で並ぶと、ノコギリヤミーを探す為に写真館を跡にした。

『操緒を返せ……！！』

その頃、ノコギリヤミーは夜の洛芦和を闊歩し、女性を次々に襲っていた。

近くにいる男性を殴り倒して女性を襲い、顔を見て『お前が操緒か？』と聞き、相手が『違う』と答えれば容赦なく投げ飛ばす。

すでもう10数人が被害にあっている……このままでは被害は拡大する一方だ。

ノコギリヤミーは次の狙いを定め、ボテボテと歩み始める。

逃げる女性……追うヤミー……。

女性が途中で腰を抜かしてこけると、ノコギリヤミーは今度は信じられない速さで女性へと駆け寄った。

腕の大きなノコギリを振り上げる……そして……、

『フォームライド ファイズ アクセル』

『ぐう！？』

弾かれた。

ノコギリヤミーが正面を見ると、そこには胸部が開かれた赤き閃光…仮面ライダーファイズ アクセルフォームの姿が。

彼は腰の白いベルトに手を掛けると、レバーを引いて変身解除。

解除されてから…それがようやくディケイドの変身していたファイズだという事がわかった。

士、我硫、翔太郎、フィリップの4人はノコギリヤミーの前に出ると、それぞれのベルトを腰に巻きつけた。

『貴様ら…邪魔をするなああ！！操緒を出せえええ！！！！』

「悪いがそうはいかないな…アイツには、帰るべき場所がちゃんとある…。夏目智春と洛高科学部っていう…最高の場所がな。お前のやろうとしている事は、お前の愛する妹の居場所を奪おうとしている事だ。」

「そうですね、僕もこの世界に関してはよくわかりませんが…これだけは言えます。『彼らの居場所を奪う権利はお前に無い』…それだけですかね？」

「コイツあ智春からの依頼なんだ…きっちり果たさせてもらっぜ…？」

「行くよ…皆…！！」

『何だ貴様らは！！！！』

「覚えておけ！！俺（僕）は…、」

「俺達は！！！」

「僕達は！！！」

「「2人で1人の！！！」

「「通りすがりの！！！」

「「「「仮面ライダーだ！！！！！！！！！！」

『サイクロン！』

『ジヨーカー！！』

掛け声とともに、翔太郎とフィリップはそれぞれのガイアメモリを鳴らした。

士と我疏もカードを構える……その時……、

ブウン…!

「「「あ?」「」」

「来ましたか…。」

変身しようとする4人の前に、『赤、黄色、緑』のオーロラが出現した。

そこから一枚のメダルが転がってくると……それを追いかける形で新たに青年が1人出てくる。

「あゝ!ちよつとちよつと!」

メダルは翔太郎の足にぶつかり、彼はそれを拾い上げると目の色を変えた。

翔太郎とフィリップはこのメダルに見覚えがある……確か風都タワー占領事件の時に……、

「あ、ごめん!それ俺の!……つて、あれ?……ダブル…?」

「オース……だよな…?お前…?」

「何故君がここに!？」

青年の名は火野映司…仮面ライダーオースに変身する青年。

とある世界で起きたグリード達による『世界を喰らう』という目的を阻止したライダーの1人だ。

何故彼がここにいるのか…土すら疑問に思う事態を、我疏は冷静に

分析した。

「言った筈ですよ、この世界はダブルとオースが入り混じった世界……恐らくは世界の綻びが原因でその2つが深く干渉してしまった結果がコレでしょう。恐らく、あのヤミーもその産物。」

「何でもありだな……この『クロガネの世界』とやらは……。」

「フフフ……さあ、役者はそろいました！行きますよ……！」

映司も加わったところで、とうとうヤミーとの決戦。

何がなんだか良くわからない映司も、この状況はまずいと判断したのか……懐からベルトを取り出し、それを腰に巻きつけた。

士と我疏はカードを。

翔太郎とフィリップはメモリを。

映司はメダルをベルトに装填すると……5人で4人の仮面ライダー達は一斉に叫ぶ。

「変身……！」

「変身……！」

「変身……！」

『カメンライド デイケイド』

『カメンライド デイブレイク』

『サイクロン！ジョーカー……！』

『ライオン！トラ！バッタ……！』

士と我疏はそれぞれのカードから引き出される力を纏い…仮面ライダーデイケイドと仮面ライダーディブレイクに。

翔太郎はフィリップのサイクロンメモリと共に彼の魂を宿し、一陣の風をまき散らしながら仮面ライダーダブル サイクロンジョーカーへ。

そして映司は黄色のメダル2枚と緑のメダル1枚から発せられるエネルギーをオーラングサークルとして装着し、仮面ライダーオーズラトラバへと変身を遂げた。

4人のライダーは腕をまっすぐ構えると、ノコギリヤミーへ立ち向かう。

「オーズ…あなたは何故タトラバにならないのですか？」

「え？だって皆さんに迷惑かけられないし…。」

「お前はタトラバを何だと思ってるんだ!？」

デイケイドからの華麗なツツコミをさらに華麗にスルーし、オーズはトラクローを展開させてノコギリヤミーへと突っ込んだ。

しかしその固すぎる体に簡単に弾かれてしまい、オーズは地面に倒れる。

そこへダブルとデイケイドがダブルライダーパンチを仕掛けるが…
…結果はオーズと同じ。

「コイツ…なんて硬さだ…!!！」

『翔太郎、パワーで行こう!』

「なら俺はこのメダルで…!!！」

「よし…お前ら行くぞ…!!！」

『ヒート!ジョーカー!!!』

『ライオン!ゴリラ!バッタ!』

『フォームライド クウガ タイタン』

それぞれフォームチェンジを遂げると、今度は3人で同時にノコギリヤミーへと掛かっていく。

ライドブツカーをタイタンソードへと変化させたDCDクウガの重
い一撃と、オーズのゴリバゴーン…それを中心に食らっても平然と
しているノコギリヤミー。

これでもパワーが足りない…ダブルとディブレイクは少し後ろに下
がった。

『どうするんだい？我硫智？』

「……………来ます。」

「あ？」

『闇より暗き深淵より出でし…其は、科学の光が落とす影…』

その時……何処からともなく紫色の重力球がノコギリヤミー目掛け
て飛んできた。

ノコギリヤミーはそれに気づき逃げようとするが……巨大な重力の
塊であるそれはノコギリヤミーの体を引き付けて離さない。

敢え無く重力球はノコギリヤミーを完全に捕捉し、その体を並大抵
の人間ならバラバラに出来るほどの激しい重力の渦に巻き込んだ。

『ぐううううおおおおおおお！……！……！』

とてつもない悲鳴を上げるノコギリヤミーだが…これだけでは決定打にはならず、大したダメージは与えられなかった模様。それでもこの攻撃を撃つた少年…夏目智春は諦めてはいなかった。彼は自身の愛機である機巧魔神『黒鐵』を後ろに携え、まっすぐとノコギリヤミーを見据えていた。

「皆さん今です!!!」

「夏目か…良い援護だぜ!!!」

「ありがとうよ智春!!!」

「え…?と、智春…!?それって確か和葉ちゃんの…!!!」
オーズだけが何か思いつめた表情をしていたが、ディケイドとダブルは彼の援護に感謝して姿を基本形態に戻し、再び攻撃。隙を突かれたためか先ほどよりは良いダメージを与えられた。

(『クロガネの世界』……機巧魔神……クロガネ……黒鐵…?!!
…夏目智春……まさか…!!!)

「成程そういう事ですか……フフフ…考えてみれば納得がいく…。」
3人が戦う中、ディブレイクは何かに気付いた様で1人でフフフと笑っていた。

すると彼の腰のカードホルダーからカードが一枚飛び出し、それに徐々に絵柄が浮かび上がる。

完全に浮かび上がると、ディブレイクはディケイド達へと叫んだ。

「皆さん！！切り札を手に入れました……一気に決めましょう！！」

「切り札だと……？我疏、どういう事だ……？」

「そのままの意味です、さあ……行きましょう。」

「俺も……いきます……！」

「行くぜ、フィリップ！」

『ああ。』

そして……ディケイドはケータッチを、ディブレイクは先ほどのカードを、そしてオーズは3枚の『鋼色』のメダルを取り出した。

まずはディケイドがそれを順にタッチしていき……ライダー達の力を解放していく。

『クウガ アギト リュウキ ファイズ ブレイド ヒビキ カブト デンオウ キバ ファイナルカメンライド ディケイド』

ケータッチをベルトに装着すると……ディケイドはその姿を最強形態たる『コンプリートフォーム』へと変えた。

更に……ケータッチ紋章が若干変化し、ディケイドはそこをタッチすると胸のカードをとあるライダーの最強形態のカードに変える。

そのライダーとは……、

『ダブル カメンライド エクストリーム』

カッ！と、ダブルの体が光ると…彼らの姿は徐々に変わって行った。

全体的に『X』の文字を強調とした2人で1人の最強形態…『サイクロンジョーカーエクストリーム』に…。

2人ともエクストリームメモリ無しでの最強変身に驚いてはいたが、フィリップ側はこれがディケイドの特殊能力だと気付き、そこまで慌てふためく事も無かった。

そして…次はディブレイクの番。

ディブレイクドライバーへ先ほどのカードを装填すると…彼は一瞬戸惑い、その後勢いよくバックルを閉じた。

黒い闇が彼の体を包み込み、その姿は別の仮面ライダーへ…。

『カメンライド クロガネ』

ギギギギと…いう機会が軋むような音が鳴り、ディブレイクの体はダブルを模した姿へ…。

ディケイドですら見た事の無い…深い闇を持つ最強の仮面ライダー

…。

その名は…『黒鐵』

『仮面ライダークロガネ』だ。

「我硫…お前それは…!？」

「これが『仮面ライダークロガネ』ですよ…まさか、このカードが手に入るとは…。」

「それがクロガネ…って事は俺の守る奴ってお前なのか!？」

「違いますよ、これはただのカメンライド…本当のクロガネは…。」

そう言うと、DBクロガネはチラツと智春の方を見た。

しかしクスリと笑うだけですぐに体制を持ち直し、背中に背負った大剣『クロガネブレード』を握る。

そして……オーズの方は……。

メダルを抜き取り、3枚全てを『鋼色のメダル』と入れ替えると……オースキャナーを手に取った。

順番にメダルを読み取り……オーズはその姿を既存コンボのどれにも該当しない、特殊形態へと変える。

「変身……！」

『ハグルマ！ガラス！ネジ！ハツ！ガツ！ハツガツネ……ッ……！』

その音声と共に……オーズはラゴリバから姿を変えた。

ハグルマの様な飾りが設けられたガスマスクの様な頭部。

ガラスの様に鋭利な刃物が散りばめられた攻撃的な腕部。

そしてドリルと言っても過言ではない程の螺旋を描いたネジの脚部。

これこそがオーズの『この世界での』コンボ形態……『仮面ライダー

ーオーズ ハガネコンボ』だ。

更に目が紫色に光ると、彼は地面から『メダガブリュー』を取り出した。

全員で並び立つと、その先陣をダブルが斬り……彼らはプリズムソーでノコギリヤミーを切り裂く。

「「うおりゃああああああ……！」」

ズバツ！……！

続いてはデイケイド……腰のライドブツカーを取り外し、ガンモードに変形させるとそれでノコギリヤミーの全身を撃ち抜き、最後にはソードモードのライドブツカーを突き立てる。

グサリツ……！！

最後はDBクロガネとオーズだ。

2人は必殺技の準備に入り、それぞれ構えた。

『ファイナルアタックライド ク・ク・ク・クロガネ』

『ゴツクン！ハガネ……！』

「「はああああああ……、」「」

『クロガネライダーキック』と『グラウンド・オブ・レイジ』の為に腰を落とす2人……その後ろでは、智春も黒鐵をスタンバイ。そして、3人の強力な一撃が……ノコギリヤミーへと降りかかった。

「はああああああああ……！！……！！」

「せいやああああああ……！！……！！」

「黒鐵ええええええ……！！……！！」

全てが終わり、環緒は再びイギリスへと帰る事となった。

その彼女を見送る為、智春や翔太朗達、それに写真館メンバーも含めて空港へ。

ちなみにもその後、ヤミーが消えた事で綻びが消え、映司ことオーズは自分のいるべき世界へと帰って行った。

「それじゃ皆、色々とごめんね。」

「な〜に、気にする事あ無いさ……レディ？」

「ちよつと翔太朗……？あなたナンパすぎ……後で『お話し』ね？」

「なっ！？お、ま……朱湮様それだけのご勘弁を。」

「本当にハーフボイルドだね……翔太朗……」

空港のと真ん中で朱湮に頭を下げている翔太朗に、環緒含めて全員思わず笑ってしまった。

勿論我疏もだ。

『お姉ちゃん、向こうでパパとママによろしくね』

「了解……それじゃ操緒、しばらくまた会えなくなるけど……しつかりね。トモ君もね！」

「あ、はい！」

『大丈夫だよお姉ちゃん！何せトモには操緒がついてるんだからね』

「それが余計に心配なんだよ……」

智春がそう言うと、再び笑いが巻き起こる。

笑った笑ったと涙を拭きとると、環緒はキャリーバックを引いて中へと入って行こうとする。

しかしそれを土が呼び止め……彼は最期に、全員で記念に一枚、パシャリと撮った。

写真館に帰り着いた土達。

彼は現像した写真を店の方に持っていくと、それをテーブルの上にはら撒いた。

ほとんどピンボケで何も撮れてやしない…しかしその中の一枚を我
硫は手に取り、口元に手を押さえて笑った。

「これは良い写真ですね。」

「どれだ？」

彼が差し出した写真…それは…、

『智春と【実体のある】操緒の後ろに光る黒い戦士、そしてその隣に立つダブルとオーズ』

「まるで未来を映しているかのようです。」

「結局…俺が守るべきクロガネっていうのは誰だったんだ？なんか腑に落ちねー。」

「いいんですよ、あなたはちゃんと守りましたよクロガネの変身者をね。」

（まあ…『ソウルサイド』の方を『間接的』にですが…。）

「それでは僕はこの辺で失敬させていただきます。」

「あれ？我硫君帰っちゃうの？折角コーヒー淹れたのに…。」

とても残念そうにそう言うのは最初から通して空気過ぎた栄次郎。

ライダーのくせにまともなセリフすらなかったユウスケと夏海より

はマシか……。

我硫は『では、』と、コーヒーを手に取り一気に飲み干すと、それをお盆の上に返して写真館の外へ。

士がそれを追いかけて、彼は我硫に拳を突き出した。

「我硫：お前は確かにむかつく奴だったが……まあ、それなりに役には立った、褒めてやる。」

「フフ、素直じゃないですねあなたは……。お役に立てた様で、何よりです。」

我硫も拳を突き出して士のそれにぶつけると、彼の後ろにオーロラが現れた。

最後まで名残惜しそうに後ずさり……我硫はその姿を完全に消した。どこか胸にぽっかりと穴が開いたような気分になる士……それを紛らわそうと、写真館に戻り背景ロールに手を掛けた。

「よし行くぞお前ら！！次の世界へ！！」

「おっ！次はどこだろな！」

「行きましようー！」

勢いよく手を振り……入れ替わる背景。

そして出てきたのは……、

来訪するD / 我琉とクロガネとWクライン 後編（後書き）

と、いうわけでツリーさんありがとうございました！！

本当はレイジも出す予定だったんですが……おのれオーズ……！！

我琉の出ている作品『仮面ライダーディブレイク（仮）』は現在リメイク中！！

この後我琉がどうしたのかはそちらの作品を読んでお確かめください！！

次回：バース4 人気投票結果発表男性編

パース4：人気投票結果発表男性編

伊達「さあさあとどうやってまいりましたこの時間!!!」

里中「全作&前作合同、男女別人気投票結果発表です。」

伊達「司会はこの俺!!!いい男の代名詞、仮面ライダープロトバースこと伊達明と!!!」

里中「後藤さんの上司の里中エリカです。」

伊達「里中ちゃんテンション低いよ?もつとあげてあげて!!!」

里中「無理ですよ、だって休日返上って……ちゃんとお給料出るんですか?」

伊達「俺に言われてもねえ……仕方ないんじゃない?会長の命令だし!それに言えばちゃんとくれるだろ給料。」

里中「はあ……もういいです、さっさとはじめてとつとと帰りましょう。」

伊達「よし来た!!!そんじゃ行くぜ!!!」

後藤「うわあああああああ!!!!!!伊達さんだ!!!
!!!伊達さんがいるぞ火野!!!!!!こりゃあ人気投票なんてやってる場合じゃないぞ!!!!!!さっそく伊達さんに会いに行こう!!!
!!!!!!」

映司「変身。」

『プテラ!トリケラ!テイラノ!プット!テイラノ!ザウルス
!!!』

『プット!テイラノ!ヒッサツ!!!』

バース4：人気投票結果発表男性編

伊達「っしゅあー！まずコイツあ、皆のお気に入りのキャラに男女別に投票してもらって、そこからポイント制で1位が5p、2位が4p、3位が3p、4位が2p、そして1位が1pで、このポイント数を競い合うってもんだ。」

里中「男性キャラは総勢20名、女性キャラは総勢19名に票が入りました。」

伊達「ちなみにこん時あまだフォゼマギが始まって無かったから、如月達は除外してあるぜ。」

里中「投票数が思いの外多かったんで、今回と次回に分けて別々に発表していきます。今回はまず、男性編。」

伊達「そんじゃまずは20位、行ってみようかー！」

・20位 伊達明 天堂ソウジ……1p

伊達「orz」

里中「いきなりですねー……。」

ソウジ「まあ、元気出せ伊達。」

後藤「俺は納得がいかないぞ!!! どうして伊達さんが最下位なんだ!? 伊達さんは俺の中では永遠にナンバー1かつオンリー1なんだぞおおおお!!!!!!!!!」

シヨウイチ「ソウジが最下位とはどういう事だ!!! おいスタッフ!!!!!!」

賢吾「今回俺達関係無いし...」 お悩み相談スタッフ

ほむら「ねえ歌星君に弦太郎、アインハルトに今度この本持つていこうと思っただけど...?」 お悩み相談スタッフ&手には『世にも恐ろしい都市伝説全集』

弦太郎「責任転嫁キター!!!!!! (・・)!!!!!!」

シヨウイチ「驚いたな... 如月が『責・任・転・嫁』なんて言葉知ってたとは...」

ソウジ「一応歌星君とほむらさんが頭良いからな。他にも美羽さんとか大文字君とかもいるし。」

シヨウイチ「そうか... 良い友達を持ったんだな。」

ソウジ「素晴らしい友情だ。」

シヨウイチ「如月!!! これからも友達は大切にな!!!」

ソウジ「若者よ!!! 大志を抱け!!!」

伊達「orz」

里中「伊達さん、そんなところで寝てないでさっさと次始めますよ。」

・18位 八神アスム 芦河シヨウイチ…2p

シヨウイチ「おお、お前と順位近いな。」

ソウジ「そうだな…やはりパーフェクト三十路なる者、いかなる時でも目立つてはいけない…陰ながら若者を支えてあげる…そういう存在であるべきだ。」

伊達「良い事言うねえ天堂ちゃん!!」 おでん喰ってり・バースアスム「ふう…ま、票が入っただけでも良しとしますか。」

はやて「まさかアスム君…こんなに順位低いなんて。」
アスム「ハハハ、気にしないで下さい。僕は人気なんて別に欲しくありませんから。それよりも次回の女性編ではやてさんの出番が来るまでまだまだ先ですし、どうです?これから一杯飲みにも。」
はやて「おつ、ええなあ!響はシグナム達に預けとるし。」

三十路×3「俺達も連れてって!!」「」

八神夫婦「いいですよ。」

里中「ただし伊達さんは除く。」

・16位 加藤シン 剣立ハジメ 尾上タクミ…3p

ハジメ&シン「メインキャラあああああ!!!!!!!!」「」

ダキバメインキャラ

タクミ「どーせ僕なんて…。」

伊達「つーわけで、何故かメインキャラの癖にこんな順位にいるハジメとシンに今の心境を聞いてみるぜ!!」「」

ハジメ「タクミさんの弟になりたいです。」

シン「同じく」

タクミ「いいよなあ他の人達はさあ……票一杯貰えてさあ……。」
里中「時に尾上さん、アナタに伝言が届いてます。」　いつものモ
ニター取り出す
タクミ「伝言……?」

由里「タクミ今回は残念だったね……でも次回があるよ!その時は頑
張ってね!」

タクミ「うん!僕頑張るよ由里ちゃん!」
良太郎「兄貴いいいい!!!光を求めるなああああああああ
あ!!!!!!!」　0票

・13位　海東大樹　襟立ケイスケ…5p

ケイスケ「1人しか……投票してくれなかった……orz」
伊達「まあ……なんつーか……どんまい。」
里中「仕方ないでしょう。襟立さんは消えた作品『仮面ライダー
CDキバ&なのは　赤き王と白い魔王』登場人物であつて、ダキバ
でも出番が少ないのですから。」
ケイスケ「それでもさ……それでも俺、DCDキバじゃ一応主人公
だったんだよ……?次のNOVEL大戦でもDCDキバ側の主要キヤ
ラなんだよ……?もうちょっと覚えてくれてる人いても良かったんじ
ゃ……。」

海東「僕は怪盗だから人気なんてそんなに気にしてないけどね。ま、
君も今度の大戦で頑張ればもう少し人気が増えるんじゃないかな?」

ケイスケ「海東……でもどうすれば……。」

海東「それは僕が教える事じゃ無い。どうすればいいのかどうすれば人気が増えるのか……その答えを知ってるのは、他にもない君自身じゃないかな？」

伊達「海東マジ良い奴。」

里中「海東さんマジいい人。」

ケイスケ「海東マジ海東。」

・11位 剣立カズマ…6p

カズマ「皆ありがと〜」

フェイト「そんな……カズマが……10位以内じゃ無いどころか10p越してすら無いなんて……!!」

カリス「おいスタッフ。」

賢吾「だから俺達今回関係無いから!!!!」

マミ「あ!あのライダーは……呪われし運命を背負いし黄昏の戦士カリスじゃない?」

弦太朗「厨二キター……(^^;)……!!!!」

伊達「ちなみに理由が……『剣立家に幸あらん事を』とか、『リア充だから』とかあるぞ。」

里中「他にも『夫婦仲良くいつまでも末永く爆発しろ』とかありま
すね。」

士「初めてユウスケに勝ったぞおおおおおおおおおお
おおおお!!!!!!!!!!!!!!!」

伊達「おめでとさん。」

里中「理由としては『ツツコミに定評のある破壊者』とか……とい
うかそんなのばかりですね。」

ユウスケ「土爆発しろ。」

伊達「これもオールライダー効果か？」

里中「門矢さん、敵役でしたかね。」

士「ユウスケに勝った ユウスケに勝った」

クウガ「土爆発しろ。」

伊達「里中ちゃん、ちよつと離れるぜ。」

里中「了解です。」

士「早速小夜達に連絡だ!!!」

Uクウガ「土爆発しろ。」

士「ところでユウスケ……お前さつきから何を……、」

R Uクウガ「土爆発する。」

・ 8位 火野映司… 15p

伊達「8位は我らが主人公、火野だ!!!」

映司「本当に!? 皆ありがとう!!!」

里中「一応主役ですからね、10位以内には入ってないと…。」

伊達「ちなみに火野に入れた人の理由は、『パンツ発言が無ければ
いい人』とか、『基本的にはいい人』とか、『アイス映司』とか…
そんな感じ。」

映司「何か俺普段は危ない人っぽい言い方じゃないですかそれ!？」
里中「その通りじゃないですか…メダルの意味で。」
伊達「そうだな…パンツの意味で。」

カザリ「トラさん省く的な意味で。」

ウヴァさん「ガタキリバらないの意味で。」

メズール「女性の扱いの意味で。」

ガメル「メズール!コレ、ウマイ!」 けん玉喰いながら

映司「何でグリード達いるの!？」

伊達「アンコの応援だそうだ。」

里中「ちなみにさつきウヴァが天堂さん達とすれ違った時……見事に無視されましたね。」

ウヴァさん「俺は一体なんだったんだ…。」

真木「良き終末を。」

カザリ「まあ…元気だしなよウヴァ…。」

メズール「アナタには私達がついてるわ…ね?」

ガメル「ウヴァ!コレ、あげる!」 ゼリー差し出す

伊達「虫けら野郎……お前も苦労してるんだな…。」

里中「私達にできる事があれば何でも言ってください。」

ウヴァさん「お前ら……ば、バツキャロ!! (涙)」

映司「……………」

里中「7位はクラインシリーズ屈しの主人公、夏目智春さんですね。」

伊達「俺達もクラインメンバーだが直接会うのはコレが初めてだな。」

智春「そうですね…でもまさか10位以内に入れるなんて思ってませんでした。」

里中「主な理由としては『仮面ライダークロガネ』の存在が大きいようですね。」

伊達「だなあ、前IDで連載してた『ダブルクライン』の最終話2話前に満を持して登場した全作中最強キャラ、クロガネ！！こいつの再登場を望む声が多かったぜ。」

智春「だからいち早く『オールライダーVivid』で復活しました。まあ、ダキバしか読んでない人には僕が誰だか分らなかったようです…。」

里中「そしてオールライダーに続いて、スピノフの方でも前回復帰しましたね。」

伊達「ツリーさんから借りたキャラ『我硫』の変身した仮面ライダーダイブレイクがカメンライドしてな！」

智春「はい！僕が変身しなかったのは残念でしたけど…：…またクロガネが見れて良かったです。」

里中「ツリーさん、ありがとうございます。」

伊達「我硫も元気だな！！」

智春「ツリーさんも頑張ってくださいね！！」

ツリーさん、前はありがとうございます！！

伊達「DCDキバの元主人公、ワタルと俺達の仲間、泉ちゃんがラ
ンクインだぜ!!」

里中「まさか10位以内で同票がいるとは驚きです。」

信吾「ええ、俺も驚きました。まさか主人公だった人と同じ順位だ
なんて。」

ワタル「つしゃああああ!!!まだ10位以内いけたあああ
あああ!!!!!!」

伊達「すげー喜んでるな...。」

里中「ちなみに票の数だったら...泉さんの方が登さんの倍近くの差
をつけて勝ってます。」

ワタル「え?」

信吾「そうなの?」

伊達「ちなみにほとんどの奴らが入れた理由が...『ひなーん』だ。」

ワタル「え...?じゃあ俺何でこの順位...?」

里中「アナタは順位自体は高かったんですよ...順位自体は...。」

ワタル「そ...んな...orz」

伊達「しかもお前に入れてくれた奴らはだいたいDCDキバの時か
らの顔見知りだな!!」

ワタル「orz」

信吾「ワタルさん元気出してください。いいじゃないですか...それ
だけ皆さん、アナタの事を変わずに気に入ってくれてたんですよ。
それって素晴らしいじゃないか!俺は...全く知らない人が面白半
分で入れてくれた高い票より...本当に自分を好きになってくれて
入れてくれた低い票の方が価値があると思います...。」

ワタル「ひなーん。」

伊達「ひなーん。」
里中「ひなーん。」

・4位 辰巳シンジ…22p

シンジ「俺4位！？嬉しい…皆ありがとう！！」

伊達「つーわけで、4位は辰巳シンジだ！」

里中「ガタツク時代最後の投票では1位でしたけどね。」

シンジ「それでも嬉しいですよ、こんな上の方に来れるなんて。」

伊達「里中ちゃん、辰巳の理由は？」

里中「ええ…『皆のお母さん』、『作中一番の苦勞人』、『正直票
なんかよりも胃薬あげたい』……等々。」

伊達「とうわけだ、皆から胃薬貰ってきたぜ！！」 大量の胃
薬の山出しながら。

シンジ「何か凄い量出たあああああああ！！！？！？」

伊達「活動報告のコメントで今まで貯めてきた分だな。XXさんと
かハルルさんとかウボアーさんとか……辰巳に投票してくれた人は
だいたい以前のコメントで胃薬くれてたりする。」

里中「これ……全部で一体何年分あるんでしょう……。」

伊達「俺…こんだけあれば多分、毎日3食飲み続けても5年は胃薬
買わなくていいと思うんだ……。」

里中「私もそれぐらいは持ちそうですね……。」

シンジ「え？1か月分……じゃ、無いんですか……？」

伊達「辰巳…いや、シンジ……。強く生きるよ……。」

里中「レンさんとかミホさんに弄られても強く生きてください……。」

シンジ「え？ええー！？」

・第3位 アンク…23p

アンク「俺が3位だと!?!」

伊達「すげえじゃねえかアンコ!?!」

里中「お悩み相談室効果ですね。」

アンク「俺が3位…:か…!?!」

伊達「満足してるか?」

里中「理由としては、『マジいいお兄さん』とか『相談室頑張れ』

とか『映司達と仲良く』とか…:いい人っぽいところを前面に押し

出している意見が多いですね。」

伊達「実際良い奴だぜ、アンコは!?!」

里中「まあ…:オズクラではメダルの取り合いが絶えないですけどね。」

「

映司「アンクおめでとう!?!」

比奈「今日はアンクの好きなアイス、好きなだけ食べていいよ!?!」

知世子「今日はお祝いよー!?!」

信吾「ほらアンク、俺の体使っていいから。」

アンク「お…:お前ら…:!」

伊達「いつもアインハルトちゃんとヴィヴィオちゃんの相手して疲れるだろ?今日ぐらい…:羽休めしてもいいんじゃないか?」

里中「会長がケーキを用意してくれるそうです。」

伊達「アンコ、今の心境をどうぞ!!」
アンコ「アイツらを選んだのは……俺にとって得だった……間違いな
くな!!」

・2位 後藤慎太郎…30p

伊達「後藤ちゃんがバースだ!!」

里中「後藤さんがバースです。」

会長「素晴らしいツツ!!!新しい仮面ライダーバース後藤慎太郎君の誕生だ!!!おめでとうつつ!!!!!!」

カザリ「なんなのあのバース…!」

メズール「めちやくちやだわ…!!」

後藤「俺が…2位…?」

伊達「そうだけ後藤ちゃん!!やったな!!!」

里中「ちなみに後藤さんの理由は、『バースだから』とか『バースだし』とか『バースによるバースの為のバースなキャラ立て』とか……とにかくバースな理由が多いですね。」

会長「私の目に狂いは無かった……素晴らしいよ後藤君ツツツツツツ!!!」

伊達「後でアンコと合わせてお祝いしねーとな!!あ、後藤ちゃん俺おでん喰いたいから鍋持ってってもいい?って、アレ…?後藤ちゃん?」

後藤「俺が2位……伊達さんは20位……俺が……、」

『カポーンッ!カッターウイング』

バース「うわああああああああああん!!!!!!!!!!そんな
のウソだあああああああ!!!!!!!!!!そんなの認めるものかあ
あああああ!!!!!!!!!!」 カッターウイングで

里中「ご、後藤さん!?!?」

伊達「何やってんだ後藤ちゃん!」

バース「伊達さんの方が順位低いなんてありえない……スタッフて
めえらどついう仕事してんだゴラあああああああああああ
あああああ!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

賢吾「おいなんかこつち来たぞ!」

ほむら「弦太朗撃退体制!」

フォーゼ「宇宙キターーーーー(030)ーーーー!!!!!!!!!!」

「
マミ「まずいわ!あのバースは今周りにとつもないオーラを発
生させている……恐らく彼の怒りがベルトに伝わり、宇宙という名
の生命体の力をそのベルトにチャージしてるのよ!」
杏子「おいマミお前少し落ちて着け厨二丸出しだぞ。」

バース「伊達さんがバースだあああああああ!」
!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

伊達「後藤ちゃんストップ!!!!!!!!ストーーーーップ!!!!!!!!!!」
!」

『仮面ライダー×仮面ライダー フォーゼvsバース MOVIE
大戦D A T E S A N』に続く!!!!!!!!!!

賢吾「続いてたまるかあああああああああああ……！！！！！！」
「……！！！！！！」
ほむら「さあ、続いては一位の発表よ！！！！！！」
賢吾「暁美お前は少しは止める努力をしろおおおおお……！！！！！！」
「……！！！！！！」
里中「気を取り直して、ちゃっちゃんと1位発表です。」

・1位 登オトヤ…49p

伊達「と、いうわけで記念すべき人気投票第1回目の1位に輝いたのは……『仮面ライダーダークキバVivid』主人公 登オトヤだけ……！！！！！！」

里中「おめでとーございます。」

オトヤ「」

伊達「ん？おーい……オトヤ？」

オトヤ「ま……マジですか……？」

里中「マジです。」

オトヤ「夢じゃ……無いですか……？」

伊達「夢じゃねえよ。でもまさか……後藤ちゃんに19p差もつけるとは……正直今回、1位後藤ちゃんだと思ったもん。」

里中「でもそこはさすが主人公、見事に主人公としてのメンツは保てましたね。」

伊達「何気に票の数……一番多いからな。」

里中「オールライダーでも活躍しましたしね。」

オトヤ「な……なんか……びっくりしすぎて腰ぬけた……。」

伊達「え……ちなみにオトヤの理由は『頑張れ』とか『色々頑張れ』

とか『ダークキバだし』とか『キバ&ダキバ好きの俺にはこれしかない!』とか…まあ、結構いいコメントもらえてるっばいぜ。」
里中「お祝いにクラスメイトの皆さん来てますよ。」

ハジメ「登爆発しろ。」

シン「俺達ほぼ最下位近かったのに……!!」

アインハルト「おめでとうございます!」

ダキバット『もげりやあいいのに。』

オトヤ「ちよつと待てアイン以外不吉だわ!!ダキバットには全力でゴメン!!!」

ハジメ「俺今、クウガの気持ちがよくわかるんだが…どうしたらいいと思う?」

シン「よし、お祝い殺るか!!」

オトヤ「『やる』の字が違うな?文面で表したら絶対に『やる』の字が違うな!」

アインハルト「それにしても凄いですよ1位なんて!さすがですね!」

オトヤ「あ、いや……あ、ありがとう。」

カリス「爆発すりゃいいのに。」

バスター「全く全く。」

伊達「良かったなオトヤ、これで今までの不遇な扱い、一発で拭えるぜ!!」

里中「ふあ…それじゃそろそろ終わりみたいなんで……私はこれで帰ります。お疲れ様でした。」

アインハルト「よしっ!私も次回頑張ります!!」

パース4：人気投票結果発表男性編（後書き）

次回、人気投票結果発表女性編！！！！

バース5：人気投票結果発表女性編

オトヤ「ええーつと……皆さんこんにちわ。登オトヤです。」

アंक「アंकだ。」

オトヤ「今回は人気投票結果発表女性編という事で……男性編で1位だった僕と、」

アंक「何故か最近ダキバツと並んでバースキャラのマスコットの扱いになつてきたこの俺アंकが司会を務めたいと思う。」

オトヤ「前は伊達さんと里中さんだったんで代わりになるかわかりませんが……」

アंक「精一杯努力したいと思いますので、よろしくお願いします。」

」

バース・デイ「女性編ではきつと里中が1位だ……！里中、伊達さんの仇を討つてくれ……！」

フォーゼ「いや、きつと1位はユウキか美羽か友子だぜ……！」

バース・デイ「里中だ……！」

フォーゼ「ユウキか美羽か友子だ……！」

バース・デイ「里中だ……！」

フォーゼ「ユウキか美羽か友子だ……！」

ほむら「さあて……後で弦太郎締め上げるか……。」

バース5：人気投票結果発表女性編

オトヤ「後藤さんと弦太朗さん放っておいていいの!？」

アंक「たしかに気になるが……今はそれは気にするな!!長くなる!!!!」

オトヤ「え、いやでも……あ、暁美さんがフォーゼ締め上げてる……」

アंक「おっ、続いてバース・デイも締め上げてるな……」

オトヤ「……あ、大人しくなった……。それじゃ気を取り直して……まずは19位から発表しましょう!」

アंक「こいつらだ!!!!」

・19位 八神はやて スバル・ナカジマ 市ノ瀬蕎香……1p

はやて「なん……だと……orz」

スバル「わーい、入ってるー!」

蕎香「正直私に入るなんて思ってたわ……」

オトヤ「皆さんの理由としては、『比較的常識人』というのがありますね……」

アंक「時にスバル、ティアナはどうした?」

スバル「ティアア?あー……ティアなら……、」

ティアナ「どーせ私なんて誰も票入れてくれない嫌われ者なのよ……フフ、笑えばいいわ……。」
良太郎「奇遇だね……僕もさ……。僕らなんて所詮、日向を歩けない腐った虫けらなんだよ……。」
ティアナ「……兄さん……。」
良太郎「ティアナちゃん……僕の……妹になれ……！」

オトヤ「何か勧誘してる……！！！！？？？」
アंक『良太郎がとうとう弟から兄貴に進化するぞ！？』
スバル「ティア行っちゃ嫌だ……（涙）」
はやて「ここおったら長くなりそうやし……なんか美味しいもん食べ行こうか蕎香ちゃん？」
蕎香「そうですね……。」

・16位 リオ・ウエズリー リンフォースイー……2p

リオ「おお！私入ってるよ！」
リン『リンもですー！』
アंक『お前らの場合は純粋なキャラ票だ、よかつたな原作で人気溜めといて。』
オトヤ「リンさんもリオちゃんも、ダキバじゃ出番……少ないもんね……。」
リオ「前のダキバじゃそれなりに出番あったのに……。」
リン『リンも『DCDキバ』だったら門矢さんとユニゾンしてガジェットをギッタンボタンにしたのに……。』

夏海「だってランクインですよ！？まだ出てないのにランクインですよ！？きつと皆さん私の健気さに胸を打たれたんですよ！！！」
オトヤ「わかりましたから…少し落ち着いてください見てるこっちが恥ずかしいです…。」

夏海「ランクイン！ランクイン！」

アंक「おい夏海…喜んでいるところに水を差して悪いが…。」

夏海「何でしょう。」

アंक「お前、一応昔はレギュラーだったのに…一発キャラだったミホと順位同じだからな…。」

夏海「」

ミホ「あ、初めまして姫路ミホです。ガタツク時代の『仮面ライダーⅩ仮面ライダー 龍騎&555 NOVEL大戦DCD』でのみ登場したキャラで、仮面ライダーファムです。ちなみにシンジの中学時代の同級生で今度のNOVEL大戦にも登場するのでよろしくお願いします！」

夏海「」

ミホ「それにしてもシンジむかつくわよね…私を差し置いて男性4位って…ま、いいけどさ。」

夏海「」

オトヤ「あ、アंकアंक…夏海さんどうしよう…？」
アंक「知らん、ほっとけ。」

アंक『まさかの比奈がランクイン……だと……!?!?』
オトヤ「コロナちゃんおめでとう、良かったね。」
コロナ「はいオトヤさん！ありがとうございます！」
アंक『ちなみにコロナと六夏はキャラ票、比奈は『信吾との絡みが面白い』とかだな。』

オトヤ「比奈さん、おめでとうございます。」

比奈「うん、ありがとう。」

コロナ「今日はこの後、比奈さんと一緒にクスクシエでお菓子ご馳走になるんですよ！」

オトヤ「へえー、いいね。」

アंक『おい、アイスはあるのか？あるなら俺も行く。』

比奈「あるよ、じゃあ後で皆でおいだよ。」

オトヤ「ひなーん。」

六夏（何この雰囲気入り込む余地が無い……。）

真日和「会長は邪すぎるんすよ。」

・ 9位 咲華…… 5 p

咲華『やった!』

アंक『めでたくラインメンバーが10位以内に滑り込んだぞ。』
オトヤ「和葉さんの射影体の咲華さんだね、おめでとうございます。」

咲華『私、見た目通り影薄いからどうなる事かと思っただけ……何とか入れてよかったわ。』

アंक「いや……別に影薄いという事は……んー。』
オトヤ「んー……………」

咲華「ちよつと、黙らないでくれる?」

オトア「んーごめんなさい……。」

アंक「ちなみにお前に入れてくれた理由は、『和葉の良いパートナー』だとか、『幽霊なのに存在感ある』とかだ。良かったな、存在感あるそうだとぞ。」

咲華「ある『そう』って何よ!? 普段は存在感やっぱ無いの!? 自分で言うのは良いけど人に言われるのなんかやだ!」

オトヤ「咲華さんって和葉さんと同じ顔で性格だいたい違うなあって思っていましたけど……だいたい一緒にみたいです。」

アंक「そうだな。」

咲華（納得いかねー……………。）

・ 8位 黒崎朱湮…………… 9 p

朱湮「ウフフ……………ありがとう。」

アंक「8位には9 p獲得したダブルクラ真のメインヒロイン、朱湮だ。」

オトヤ「ちなみにバースキアラ屈指のお姉さんキャラです。」

朱湮「翔太郎やフィリップは確か0票だったのよね?」

アंक「ああ、智春はランキングに食い込んできたがな……やはりクライシシリーズの主人公といえば智春と映司という声が多いからな。」

朱湮「ふーん……………さてと……」 荷物取り出す

オトヤ「あ、あのー……………朱湮さん?」

朱湮「ん? なあに?」

オトヤ「それ……なんですか？」

朱湊「マシンガン。」

アंक「なんてもん取り出してんだ!？」

朱湊「フィリップはともかく……とりあえず翔太郎はダブルの癖にランクインできなかったから制裁しよう」と……、

オトヤ「作者に言ってください!!」

アंक「ダブクロの更新停止している作者に言ってください!!」

・7位 苑宮和葉…… 14 p

和葉「2人とも……大丈夫？」

ダークキバ「ぜえはあ……ぜえはあ……!」

アंक（完全態）「しゅ、朱湊取り押さえるのマジ疲れた……アイヌ喰いたい……休憩したい……。」

和葉「た、大変だね……えっと、8位は『オーズクライン』主人公の苑宮和葉です!ヒロインじゃないですよ!主人公ですよ!!」

アंक「前の連載の時は俺とも面識あったが、今連載中のオズカルでは面識無いな。」腕だけに戻った

オトヤ「アंक『二巡目』行ってないもんね。」

和葉「うん、だから映司さんが自分でメダル選んで戦ってるよ。」

アंक「あのバカにメダルほとんど持ってかれてこっちは大変だ。」

和葉「ねえ、私の投票理由ってどんなのあるの？」

オトヤ「はい、えーっと……まずは……『ブラコン』。」

和葉「は？」

アंक「というかそんな感じの理由はつかだな。唯一あるとすれば……『家族思い』ぐらいか?要するにブラコンだな。」

和葉「え、ちよっ……私ブラコンじゃないよ!？」

オトヤ「いえ、ブラコンだと思いますよ……?」

アंक『比奈に負けず劣らずだ。』
和葉「私そんな描写あった!？」

オーズクライン参照

咲華『皆、オーズクラインよろしくね!!』

・6位 嵩月奏……17p

嵩月「チツ。」

アंक『おい今舌打ちしたな?今絶対舌打ちしたな!?!』

嵩月「して無いですよ。メインキャラなのに順位過剰に高く無いなあとか、最近出番無いなあとか、そんな事より誰か焼きたいなあとか全然考えてませんから。」

オトヤ「この人こえええええ!!!!」

アंक『と、いうわけで7位には恐らく女性キャラでは最強…いや、『最凶』の嵩月奏だ。その実力は……なんと、あの知世子にも匹敵する……!!!!』

オトヤ「何それ恐ろしい!?!」

アंक『ああ……マジばねえ……!!!!』

オトヤ「入れてくれた理由は『可愛い』とか『おっとりしてる』とかあるけど……そんなの絶対嘘だ!!僕は認めない!!認めるものか!!!!!!」

アंक『コイツにそんな時代あるわけえ!!何かの間違いかフィクションだ!!!!!!』

嵩月「」 笑顔で焰月装備

お察し下さい

・5位 水無神操緒……18p

嵩月「チツ。」

操緒「奏ちゃん今舌打ちしたね？絶対舌打ちしたね!？」

嵩月「してないですよ。幽霊の癖にとか、無機物どころか透過物の癖にとか、女なのに主役ライダーやりやがってこの糞女がとか全然考えてないですよ。」

操緒「ねえ私達親友なんだよね？親友だよね!？」

嵩月「勿論ですよ、ミサオオチャンダイスキー（棒）」

アंक「最近、嵩月奏の恐ろしさが格段に上がっているような気がする……。」

オトヤ「どうしてこうなったorz」

嵩月「登君とアंकさん後で絞める。」

アंक「ごめんなさい。」

オトヤ「勘弁してください。」

操緒「と、いうか……私の……しょう、か……い……orz」

アंक「えー、気を取り直して……操緒に入れた人は、智春に入れ

てくれた人が大半で、どちらも仮面ライダークロガネの再登場を待っている人たちだな。』

操緒『仮面ライダークロガネは前々回のスピノフでツリーさんとこの我疏さんが変身したよ!』

オトヤ『我疏さん、ありがとうございました!』

操緒『ツリーさんもありがとう!』

ツリーさん、前々回はありがとうございました!!!

アंक『コレ2回目だろ!?!』

・4位 フェイト・T・H・剣立………27p

フェイト「カズマ〜 ハジメ〜 やったよ〜」

オトヤ「フェイトさん、おめでとうございます。」

アंक『4位はクウガライジングアルティメット爆発対象の嫁、フェイトだ。』

ストロンガー「ただでさえ長い苗字が結婚した事で更に長くなったな。」

フェイト「うん、でもテストロッサもハラウンも大事な名前だからとつときたいの。」

アंक『まあ、これ以上増える事は無いし……別にいいだろどうでも。』

フェイト「どうでも言うな。」 ライオットザンバー装備

アंक『ごめんなさい。』

ヴィヴィオ「いや、私のパパアंकじゃないし……。」
オトヤ「ここに来てアंकが壊れ始めた件について。」
ヴィヴィオ「うーん……でも1位じゃ無いのかあ……オト兄1位だったし、私も1位がよかったなあ……。」
オトヤ「僕の場合は……なんというか……主人公補正？」

ヴィヴィオ「でも正直、それ人気投票じゃなくて戦闘で発揮されるべきだよね！」

オトヤ「orz」

アंक『ヴィヴィオに入った理由は『色々頑張れ』とか『この頃過激だね』とか、お前を心配してくれる声が沢山あった。』

ヴィヴィオ「わー、皆ありがとー！」

ストロンガー「良かったな、少女よー!!」

オトヤ「それじゃヴィヴィオ、後でお祝いしようね。」

ヴィヴィオ「うん！」

・2位 登なのは……34p

アंक『空気読めよこん畜生!!』

なのは「ええー………?」

オトヤ「アंकが本格的に壊れた件について。」

アंक『なに娘より上位に来てるんだよ!? おかしいだろ!? 年増はすっこんでるダラスが!!!』

なのは「orz」

オトヤ「母さん……。」

『クロガネ!!!マキシマムドライブ!!!』

・1位 アインハルト・ストラトス……60p

アインハルト「へ……?私……1位ですか……?」

オトヤ「圧倒的すぎるだろおおおおお!!!??何コレ2位と26p差つて!?!つか僕よりも11pも高いし!?!」

アंक「おめでとう!!!!!素晴らしいッ!!!!!」

アインハルト「私が1位……本当ですか……?」

オトヤ「あ、うん……そうだよ、女性編でも総合的でも君1位……」

アंक「くっ……陰ながらフォローしてきた戒があった……アイ
ンハルト!!!俺は今最高に満足しているぞ!!!!!」

オトヤ「理由は色々あるよ、『良い子』だとか、『めっちゃ良い子』
だとか、『文句なしで好き』とか、『恋する乙女?いいえ霸王っ子
です』とか……さすがは60p……格が違う……」

アंक「他にもお悩み相談室が良い刺激になっている様だな。ダキ
バでもオールライダーでも、原作の主人公っぷりを控えてヒロイン
要素押し出してるし。」

オトヤ「何はともあれ、ダキバキャラから両方とも1位が出るって
いうのは嬉しいよね!アインおめでとう!」

ハジメ「登とストラトス爆発しろ。」

シン「むしろ爆撃する。」

ルーテシア「むしろ大爆撃する。」

ストロンガー「天が呼ぶ地が呼ぶ人が呼ぶ…悪を倒せと俺を呼ぶ…俺は仮面ライダーストロンガあああああ!!!!!!」

アインハルト「私なんかがいいんでしょうか…？他にも魅力的な人はたくさんいるのに……。」

オトヤ「全然問題ないよ！アインも十分魅力的だよ！」

アインハルト「……………」

オトヤ「あ。」

アインハルト「ノノノノ」

オトヤ「……………(汗)」

RUクウガ「!!!! 天が呼ぶ地が呼ぶ人が呼ぶ…爆発させると男達が呼ぶ…俺は仮面ライダークウガライジングアルティメットおおおおおお!!!!!!」

アंक（完全態）「アインハルトの幸せタイムなんだから邪魔すんなゴルアあああああああ!!!!!!」

アインハルト「あ、あの…ありがとうございます……。」
オトヤ「あぁいや……こちらこそ……。」

アंक「プロミネンスドロップうつつつつつつ……!!!!!!」
RUクウガ「ライジングアルティメットマイティキック!!!!!!」

パース5：人気投票結果発表女性編（後書き）

今回はコラボ番外編！！

アインハルト「えっと……仮面ライダー……ですよね？」
プトティラ「OOO」

カズマ「うちの店がああああああ……！！！！……？……？」

プトティラ「うんとねー……頭がシャチで……真ん中がうなぎで……脚は
タコ……！」

アインハルト「何そのゲテモノ生物！？」
プトティラ「OmO」

タトバ「個性が無いっていうなああああああああ……！！！！！！
……！！」
後藤「ここはどこだあああああああああ……！！！！！！
……！！」

番外編：アインと兄弟と何コレカオス

「個性が無いって言うなああああああああああ……！！！！！！」

アインと兄弟と何コレカオス

「えーっと……次の買い物は……。」

良く晴れた日曜日の昼下がり……アインハルトは母親からお使いを頼まれ、トボトボとスーパー巡りをしていた。

彼女の肩の上には愛機である『アステイオン（愛称：ティオ）』が乗っかっており、2人は楽しげに話しながら買い物中。

いつもならトレーニングに明け暮れる毎日だが、クラスメイトであるオトヤや、後輩で親友のヴィヴィオとの出会いによりいくらか心に余裕が生まれた彼女……最近ではいつもトレーニングという事は無く、普通に遊んだり、買い物したりするようになった。

最後に買うものは……『香水』。

正直こんなの自分で買いに行けよと思いつつも、アインハルトは化粧品屋へと足を向けた。

（あーあ……本当なら今日は皆と遊びに行く約束だったのに……。）

『じゃあ。』

「そうですね、早く済ませて帰りましょつか。」

最寄の化粧品屋に到着して、いつも母が愛用している香水を購入すると、アインハルトは帰路につく。

今日は本当ならオトヤやハジメ達と一緒に今度ある臨海学校の準備をし、そのままどこかへ遊びに行く約束だったのだが…母親が町内会の会議で昼間留守にする為買い物に行けなかった為現在に至る。ここから自宅までは徒歩で約15分。面倒くさいと思いつながらもまっすぐ家へと歩きだし、途中でオトヤに遅くなるとメール。そして、事件は彼女が公園の前を通りがったところで起きた。それは……………、

「ぶええええええええええ！T T」

「……………」
「……………」
「ぶええええええええええんシャウタああああ！T T」

（あれは何だろう！？）

何故か木の上に引っかかっている紫色の生き物。

体格はダークキバよりもがっちりしており……その生き物が何故か木の上に引っかかかって身動きが取れなくなっている上に可愛い鳴き声を上げながら泣いている。

幸い人通りが無いので誰にも見つかっていないが……この光景はシユールすぎる。

無視して行ってもいいだろう…というか、無視した方が良い。

「か、仮面ライダー……ですよね……？」
「ぶえ？」

アインハルトの質問に首をかしげる仮面ライダー（？）
彼（？）は口元にうーんと指を持っていくと、

「プトはプトだよ？」
と、答える。

見た目は完全に仮面ライダー……。

だが、アインハルトの知っている仮面ライダーとは……バスターの
様に強く、カリスの様に勇ましく、そしてダークキバの様に優しい
……まさに『戦士』

それに比べて目の前の『プト』は……何というか……仕草がいち
ち可愛い。

いうなれば『マスケット』的な雰囲気纏っている。

何で仮面ライダーがこんなところにいるのだろう……そう思い、ア
インハルトはプトに尋ねてみた。

「あの……仮面ライダーがどうして木の上に……？」

「ぶえ？　〇　〇」

『にゃあ？』

「ぶ？　〇　〇」

『にゃ？』

「ぶいー！　>　<」

『にゃー』

「話聞いてお願いだから!？」

数分後……、

「わかんない。何か目の前がパーツて光ったらあそこいたの。」
「（言い方がいちいち可愛いです……！！）自覚が無い……もしかして別次元の仮面ライダーさんですか？」

「べちゅじげん？」

「ああ……、もういいです……。アナタお一人ですか？」

「……………」

「プトさん？」

「シャウタああああ！T T」

「あ、ああ！？な、泣かないで！」

いきなり泣き出すプト（ちなみにプトティラという名前らしい）。
そう言えば先ほど木にぶら下がっている時、『シャウタ』という
名を叫んでいた。

もしかしてプトティラの保護者か何かだろうか……そう思い、聞いてみる事に。

「あの、そのシャウタさんという方……アナタの家族か何かですか？」

「うん！O O」

「はぐれちゃったんですか？」

「……」

「あ………あ、その！私の友達に人探し上手い人がいるんですけど、よかつたら一緒に探しましょうか？」

「いいの！？」

「は、はい……」

それからとりあえずプトティラを家に連れて帰る事にしたアインハルト。

幸い両親は今日は昼間はいない……プトティラという自立ちまくる者がいても問題ない。

それより問題なのは連れて帰る前の間だ。

プトティラは大きい……隠しながら帰るのは不可能だ。

頭に翼があるからそれで行こうと言ってみたが、どうやら飛べない

らしい。

その後で『タジャ××嫌い』というわけのわからない事を言い出したがそこは気にしない。

そこで役に立ったのが魔法。

丁度今習っている気配を消す魔法……これを使い、人通りの少ない道を行けば問題無く家に辿り着けた。

プトティラを家に上げると、テーブルに座らせてから話を聞く事に。「はぐれたのはシャウタさんだけですか？」

「ううん、あとはねー……タトバとねー、ガタキリバとねー、ラトラターとねー、サゴーズとねー、パパン！……それとタジャ××。」

「シャウタさんと合わせて8人ですね？」

「あい！」

最後だけ何か突っかかるが、もは気にするまでも無い。

「シャウタさんってどんな方なんですか？特徴だけでも教えてもらえればルーテシアさんに探してもらえます。」

「ご飯がおいしいよ！○○」

「あ、いえ……見た目の特徴を……、」

「うーんとねー……、」

「頭がシャチでねー……、」

（しゃ、シャチ！？ひれ……モヒカンって事？って、やだそれ不良！？）

「腕がうなぎでねー……、」

（体が柔らかいって事かしら……？でもそれじゃ見た目の特徴には……、）

「それで足がタコ！」

「なにそのゲテモノ生物！？」

「OMO」

「あ……その……ごめん……」

あまりにも特徴的すぎるので思わず叫んでしまった。

それにしてもプトティラのそのシャウタの事を話す時の喜びよう……

……本当にシャウタの事が大好きなんだなあとしみじみに思う。

しばらく謎の沈黙が続き……それがプトティラの腹の音で破られた。

「ぷい……お腹しゅいた……」

プトティラがそんな事言うものだから、見過ごす事が出来ず……アインハルトはテーブルから降りて冷蔵庫の中を適当に浅くって見た。

昨日の夕飯の残りと野菜が少々……それとさつき、麺を買って来た。オトヤに食べてもらいたい一心で覚えて料理……まさかこんな形で役立つとは思わなかっただろう。

「焼きそばでいいですか？お肉……無いですけど……」

「焼きそば！OO いいの！？」

「はい、困った時はお互い様ですよ。」

「ありがと！アイン優しい！」

ここはどこだろう……。

何故俺はこんなところにいるんだろう……。

後藤は先ほどまで、仲間と共に『一巡目の世界』でハグルマヤミーという怪物を倒したところだった。

その途端に光に巻き込まれ、まずは仲間である火野映司が姿を消し……続いても消えた。

そして現在に至るといわけだ。

見た事の無い景色……色々と不安な後藤だが、内心少しホツとしていた。

ここへ来たのは自分1人じゃない……隣にいる仲間の肩を掴んだ。

「だが消えたのが俺1人じゃなくて少し安心した……火野、これからどうやって和葉ちゃん達のところに戻るか考えてよう。それと、その前に変身を解け目立つから。」

「あの……さっきから思ったけど……『火野』って誰？」

「は？」

「その前にアンタも……見覚えがある様な無いような……やっぱりあるようなそうでないような……？」

「ちよっと待て……火野、お前頭強く打つたりしてないか？」

「先ほど見た通り地面に突き刺さりましたが？」

「ですよー……お前、名前は？」

「タトバだけど……。」

……。

その間プトテイラはテイオと遊ばせる事に。

『もしもオトヤだけど?』

「あ、オトヤ君、アインハルトです。すいません約束に遅れてしまつて…。」

『いいよいいよ気にしないで。要件それだけ?』

「いえ……実はちょっと相談したい事があつて……… すいませんけど、うち来てくれませんか?」

『あー………ゴメン、今カズマさんとハジメに捕まつて『ACE』の手伝い中。アインこつちに来れない?』

「ええ!?!」

そう言われてアインハルトはチラリとプトテイラを見る。

これを連れて歩くのは相当危険すぎる………しかし、自分からオトヤをわざわざこつちに来させるのも失礼だろう。

頭の中で思考を何度もめぐらせ………そして、アインハルトは一つの結論を出した。

「わかりました………そちらへ行きますので………何がっても、驚かないで下さいよ…?」

続くらしい。

アインと兄弟と何コレカオス 前篇（後書き）

映司「えー……今回はハルルさんの『どたばた！オーズ兄弟』と『仮面ライダーダークキバ』のコラボという事で……オーズ兄弟から代表して、なんとラトラーターが来てくれました！」

ラトラーター「何で俺！？今回プティラとタトバ回なんだからその2人で良いじゃん!？」

アंक「いや、本当はタジヤ××とかも呼びたかったんだが……予算の都合で……。」

映司「ほら、ラトラーターって予算に優しいコンボじゃない？タジヤ××はもちろんだけど……ガタキリバなんて高すぎて呼べないよ。」

ラトラーター「地味に最悪な呼ばれ方だなおい!？」

アंक「だが気にするな!！」

ラトラーター「気にするわ!！」

ラトラーターは『どたばた！オーズ兄弟』でライオディアスを武器に大活躍中!!

アインと兄弟と何コレカオス 中編1 (前書き)

映司「今日は一部を除き、兄弟が大集合！」

後藤「俺とタトバのやり取りも見逃すな!!!」

ストロンガー「天が呼ぶ地が呼ぶ人が呼ぶ……悪に熱視線浴びせろと後書きに呼ぶ……それは三男ラトラータあああああああ!!!」

「!!!」

アインと兄弟と何コレカオス 中編 1

「ん〜ッ…！良いお天気だなあ…。」

「だなあ…。はい、飛車取り。」

「むっ…！やりますなあ…。」

登夫妻は自宅の縁側で、楽しそうに談笑していた。

オトヤは寮生活で、ヴィヴィオは今は遊びに行っている…そしてワタルは今日は仕事はお休み。

なのは洗濯物を全て干し終わると、ワタル『達』のところに座って自分に淹れてきたお茶を一口。

今日は本当に平和…いきなり空中から現れた客人に、最初はワタルもなのも驚いたが、今ではすっかり打ち解けてしまい、3人で楽しそうに将棋タイム。

結局、勝敗は客人の勝利に終わり、彼はなのはのお手製のアップルパイを一口食べて歓喜の声を上げた。

「おお！奥さんコレ本当に美味しいですよ！」

「やだ〜！ブラカワニさんったらお上手なんだから〜！」

「いやはや本当に美味しいです。甘さも控えめで。マイ息子やマイペツトも食べたら喜びますね。」

「ブラカワニさん、ご結婚されてるんですか？お子さんは何人ぐらい？」

「何だかんだで、マイペツトも娘の様に思ってるから…全部で7人ですかね？ワタル君は3人だっけ？」

「まだ3人目は妻のお腹の中ですからね…。今年中学に上がった息子と、小学生の娘が1人ずつです。」

「そうかあ…末っ子のタトバも今中学3年なんですよ。」

「そうなんですか？受験…ですよね？うちのオトヤ馬鹿だから…せめて高校ぐらいは出て欲しいんですがね…。」

「にはははは……。」

「大丈夫ですよ、うちのガタキリバとラトラーターも入れたんですから、あ、奥さんパイのおかわり戴いてもいいですか？」

「勿論ですよ、2つ食べれます？」

「これだけ美味しければ口から胃までワーニングライドですよ。」

アインと兄弟と何コレカオス

『ACE』

「……………」

「O O」

「……………」

「O O？」

「……………」

「ぶいー！><」

「『コイツ誰！？っていうかコイツ何！？』」

「だから驚かないでって言ったじゃないですか〜！」

「『うんゴメン、無理！！』」

口を揃えてそう言うのはもちろんオトヤとダキバットといういつものコンビ。

絶対に驚かない……その約束でアインハルトはヒソヒソと、こっそりと、人目を避けまくりながらようやく『ACE』までフトティラを連れてきたのにこの有様……。

お蔭で彼女はちよつと泣きそうになっており、間髪入れずにテイオがオトヤとダキバツトに噛みついた。

彼等の類には歯型がくつきりと残り、2人とも痛みには耐えながら現在客数オトヤ達を含めて合計4人の『ACE』の空いた席に腰かけた。

「ねえアイン、この人だあれ？ O O」

「登オトヤ君とダキバツトさん。私の学校のクラスメイトで、私の大切なお友達です。ちなみにぷーちゃんと同じ仮面ライダーさんですよ。」

「プトと同じ？」

「ねえアイン……コイツ、ライダーだよね……？」

『何か、見てて妙に癒されるんだが……？』

「一応……プトテイラさんと言って、自分の事『プト』とか『ぷう』とか言うのでぷーちゃんと呼んでますが……何でも家族とはぐれてしまった様で……。」

「何だろう……コイツ、全身から物凄いプテラトリケラティラノ臭が……。」

『どんな臭いだおい。』

だがしかし……どこからどう見てもプテラトリケラティラノこのプトテイラ……。

仮面ライダーが変身状態で闊歩し、なおかつ可愛くてジュース飲んでいるなんてありえない。

そんな光景が目の前に……しかも、それをもう完全に受け入れているっぽいアインハルト。

自分本当にこの子好きになっちゃって良かったのか……オトヤの頭の中にそんな不安が過った。

『家族と離れたと言ったな？ 家族とはどのような者なのだ？』

「うんとねー……頭がシャチでねー、体がウナギでねー、足がタコ！」

『何それ美味そう……！』

「シャウタ食べちゃダメ!!」

「ダキバットあとで決る。」

『申し訳ございませんでした。』

意味不明なコントを繰り広げていると、プトティラが『トイレ行きたい…O O』と言い出したので、ダキバットが案内してトイレへ。その間にハジメが恐る恐る料理を運んできて、先ほどまでプトティラがいた席に座った。

ちなみに物凄く冷たい。

「おいストラトス、なんだアレは!?!」

「私にもわかりませんよ!さつき…お買い物帰りに偶然見つけたというか…成り行きでこうなったというか…。」

「だいたい何でアイツ変身解かないの!?!そしてどうやって今ジュース飲んだの!?!」

「とりあえず…ここにいられたら普通の客が寄り付かない。お前が来る少し前にカズマさんとフェイトさんが出かけて良かったもの…セツテさんとトーレさんなんて泡吹いて倒れたぞ?悪いが、これ喰ったらよそに行ってくれないか?登はやる。」

「人を物みたいに言うなコラ。」

そうは言うが、確かにプトティラがいたらお客さんが寄り付かない。交流して見れば確かに可愛いが、傍から見たらプテラトリケラティラノなのだから…。

もしかし『プトティラ』ってプテラトリケラティラノの略なんじゃ無いか…?」

「とりあえず冷めるからさっさと食べ。その後はお前からで何とかしろ。」

「お前手伝ってくれないのか?」

「俺は忙しいんだ。悪いが今回はパスさせてもらおう。加藤でも誘え。」

「ノリが悪いな…。」

「ハハハ…いいですよ別に、強制してるわけじゃないですから…」

…それよりも、ぷーちゃんにしかお昼食べさせてないのでもうお腹ペコペコですよ、いただきます。」

「そうだね……って、アイン、そっち僕の……、」

「はい？……むっ！？」

ハジメが置いて行った料理を一口食べたアインハルト。

だが何かおかしい……。

彼女が注文したのは『トマトパスタ』……なのに辛い。

数秒してからようやく、自分が間違えてオトヤの『チリソースパスタ』を食べたのだと気が付くと、急に刺激が口の中を襲う。

アインハルトは辛い物が苦手なため……当然ながら目に涙をためて水を一気に飲み干した。

咳払いしているアインハルトの背中を慌ててオトヤが撫でる。

「ケホッ！ケホッ！……オトヤ君なんてもの注文してるんですか」

「！」

「う、ゴメン……って、そこ僕謝るところなんだろうか……？」

『にやう。』

「うう……舌がビリビリします……。」

「アイン……？OMG」

そうこうしているとプトティラが戻って来た。

オトヤとアインハルトを交互に見渡すと……プトティラは首を傾げる。

「アインどうしてないてりゅの？OMG」

『オトヤお前何した？』

「何もしてないよ！？アインが間違っってちょっと……。」

「……メ……。」

「だから……俺はタトバだあああああ！！！！！！」
「何がタトバだ！！！！俺がバースだあああああ！！！！！！」

何をどこでどう間違ったのか……殴り合いの喧嘩をし始めたタトバと後藤の2人。

理由は、タトバの『俺はタトバだ』発言に対しての後藤の『いやお前は火野だ』発言。

これにタトバの意地と後藤の石頭が絶妙なハーモニーを生み出し……現状に至る。

後藤の『俺がバースだ！！！！』という発言以降、後藤はもはやバースの事しか喋らなくなり、さすがに疲れたのが最初にタトバの方から手を止めた。

さすがに生身の人間にトラクローはまずかった。

「ぜえはあ……ぜえはあ……もう……やめにしない……？」
「さ……賛成……。」

ようやく懲りた様で、2人ともその場に寝そべった。

ぐったりとしている中、後藤は試しにタトバのベルトのメダルを取り外そうとしてみるが……確かに取れない。

それに性格とか口調も、だいぶ後藤の知る『火野映司』とはかけ離れており……どうやら本当に別人のようだ。

タトバが本名なのかどうかは別として……。

「お前……本当に火野じゃないんだな？」

「だから何度も言ってるでしょ……俺はタトバ。」

「そうか、悪かったな疑って。俺の名前は後藤慎太郎、仮面ライダーバースだ。」

「バース？俺達の住んでるところにもいたけど……そいつとは違うの？」

「俺は火野以外のオースは知らないから……多分、お前の知っているバースとは別人だ？もしかして伊達さんかな……？何でもいい、それより……ここはどこなんだ？」

「いやそれが俺にもさっぱり。家で皆で『換装！亜種ゲーム』やってたらしいの間にかこんなところに刺さってた。」

「亜種ゲーム……？俺はことは全然違う世界で、火野の変身したオーズと一緒にヤミーと戦ってたんだが……いつの間にかここに……。先に火野が消えたはずなんだがな……。」

「そうなんだ……俺等の方も、一番最初に親父が消えて……そんなにタジャドルで、その後は……順番忘れた。」

「家族全員……というわけか……？それは大変だな……わかった。タトバ、ここは協力体制を取ろう。」

「協力体制？」

後藤の案はこうだ。

自分とタトバの2人で、まずはタトバの家族を探す。

その後は全員で映司を探してもらい、最終的には皆で帰る方法を見つける。

幸い後藤は変身している状態でこっちへ運ばれた様なのでベルトもバースバスターもある。

もし万が一敵と遭遇してもタトバと協力すれば戦えるし、何よりカッターウイングが使えるのはありがたかった。

空を飛べるというだけで、その効率は全然違う。

「それじゃあタトバ、少しの間だが……よろしく頼むぞ！」

「よし来た！」

そうして握手を交わすタトバと後藤。

『仮面ライダー……オーズ……！！』

そして……それを陰から、謎の一匹の怪物が眺めていた。

「ダァーダァー！」

「よしよし、いい子だね響ちゃん。」

「すいませんサゴーズ。子守なんかをお願いしてしまって。妻が今仕事で留守なものですから……。」

「いやいや大丈夫ですよアスムさん。」

その頃の八神家では、赤ん坊である響をあやす一人のサイゴリラゾウっぱい人影が……。

彼はサゴーズ……後藤の下にいるタトバの実の兄にあたる。

どうやら気づいたら海岸にいた様で、アスムが響をあやしなから散歩していたら偶然見つけた。

その時彼は得意の柔道で、八神家道場の一番弟子であるミウラとスパイをしており、寝る当てが無いというので連れて来た。

まだ妻であるはやてにはサゴーズの事は何も言っていないが、彼女の守護騎士である『ヴォルケンリッター』の面々とリイン、アギトはどうやらサゴーズの事を気に入ったようで、家に置く事は大歓迎の様子。

特にシグナムはサゴーズと一緒に、先ほどまでずっと『暴れん坊軍』について熱く語り合っていた。

本当は『天地』についても語り合いたかったらしいが、シグナムがザフィーラに『そろそろ道場の練習の時間だろ』と連行されたのでそれは叶わず。

その後はアスムが少し家事をする為に、今までサゴーズが響の面倒

を見ていた。

響もすっかり懐いた様で、サゴーズのベルトを叩きながら遊んでいる。

「ところで、あなたの家族の事なんですが……タトバとタジヤドルとガタキリバとラトラーターとシャウタとプトティラとブラカワニ……それと母親ですか？まるでオーズみたいですわね……。」

「アスムさんオーズ知ってるの？」

「ええ、もちろん。一度共に戦った事がありますから。あの時は……『火野映司』という方が変身されてました。」

「へー。」

「よければ今、ヴィータが暇しているでしょうし……一緒に探すように頼んでみます。」

「本当ですか！？ありがとうございます！」

「悪いなガタキリバ、荷物運ぶの手伝ってもらって。」

「いやいや、こんな荷物分身すればどって事。」

「でも本当にありがとうね。そうだ、ねえカズマ、ガタキリバに何か美味しい物でも作ってあげようよ！」

「お！フェイト、ナイスアイデア！っーわけで、今から俺の店で何か喰って行かない？こう見えても腕には自信あるよ！」

「あー……ありがたいですけど、俺ちよつと用事が……。家族探ししないと……。」

店のすぐ傍で楽しそうに談笑する剣立夫妻とクワガタカマキリバツタ。

彼の名はガタキリバ……またの名を『（予算が）最強コンボ』、そして（メタい意味で）金食い虫。

彼に対応するグリードは毎回『仮面ライダーフォーゼ』に出演しており、ついこの前、彼のグリードの偽物がかつこよすぎる先輩とその他大勢にやられた。

オーズ一家の中では次男……そして双子の片割れである。

カズマ達がい出し中に、アニメショップの前でテレビを凝視していた彼を発見。

目立って騒ぎになる前に、カズマ達がこうして保護してきた……というわけだ。

「まあ、息抜きて事でさ。すぐそこだから、な？」

「カズマの料理凄く美味しいから、きつとガタキリバも気に入ると思うな」

「じゃあ……ごちになります。」

ガタキリバも承諾してくれたので、2人は早速『ACE』へ。

そこで彼らが見たものは……、

「うちの店があああああああああああああああああ……！！！！

！????????」

何か壁にどデカイ穴が開いた……自宅兼店『だったもの』だった……。

アインと兄弟と何コレカオス 中編 2

「ごめんなさああああい！！！；；；」

「いや……………慣れてるし……………気にしないでいいよ……………」

「すみません！！私のせいで……………本当にすみません！！」

『気にするな。辛い物好きのコイツが悪い。』

「ねえプトテイラ、ガブリュー貸して？」

『申し訳ございませんでした。』

プトテイラのせいで『ACE』が瓦解し、オトヤとアインハルトは何とかカズマ達が帰ってくる前に逃走成功。

物凄い罪悪感に苛まれながらも、途中のコンビニで購入した絆創膏を傷口に張り付けていく。

あの後、何とかアインハルトがプトテイラに事情を説明し、オトヤに謝罪。

それでもガブリューを受けた事には変わらないので、オトヤ的にはもうどうでも良かったりする。

慣れてるし。

そんな事よりもあの場にいたハジメ達の方が気になる……………。

大事になる前に（もう遅いけど）素早くオトヤがダークキバに変身してアインハルトとプトテイラ担いで逃げ出したので多分ばれて無かったらいいのになあ……………。

「……………とりあえず、まずはプトテイラの家族探すか……………。こいつが大人しくなる方法はそれしか無いんでしょ？」

「はい、多分……………」

「あ、ちよーちよー！ねえねえティオ！ちよーちよー！」

『にゃー！』

『おいプトテイラ……………お前他人事だと思っただけじゃないか？』

ダキバツトがそう言うが、プトティラは聞いちゃいない。ティオと楽しそうに蝶々を追いかけている。

はあとため息をつき、オトヤとアインハルトはその場に座り込んだ。本当なら今日はシンやハジメも含めて皆で遊ぶはずだったのだが……どうしてこうなった？

『すみません』と謝って少し落ち込むアインハルトに、プトティラは捕まえた蝶々を持って来て彼女に見せてくれた。

「アインちゃんちよつかまえたー！」
『にゃー』

「わー、凄いですねー。でも、蝶々も生きてるんですから、ちゃんと逃がしてあげましょうね。」

「あい。○○」
『にゃい。○○』

『おいティオ、お前顔がプトっぽくなってる！！プトっぽくなってる！！』

蝶々を逃がしながら再びティオと遊び始めたプトティラ。

何と言うか……もし子供とかができたらこんな感じなのだろうかと思うアインハルトだった。

霸王流にこだわってた頃だったら絶対にこんな事考えなかっただろうと思ひ、再度自分を変えてくれたオトヤとヴィヴィオに感謝。

すると突然、プトティラの動きが止まり……何故かプトティラは『ぐすっ……』と泣き始めた。

「ぷーちゃん？」

「プトティラどうしたの？」

「パパン………； ; ;」

「パパパン？」
「いつもパパパンが遊んでくれたの……パパンに会いたい……。」
『プトティラ……』
『にゃ……』

「パパ————ン……！……」
「<

「パパンは……だよ————」
「……！」

((何だコレ……?)))

このカレーの王子様と出会ってからのプトティラのテンションは…
…何と言うかもうMEGAMAXだ。

いや、もうむしろPUTOMAXだ。

茫然としているオトヤとアインハルトの後ろから、彼らを呼ぶ男の
声がある。

振り向いてみるとなのはとワタルが…ワタルの方は沢山の買い物袋
をぶら下げて手を振っており、彼らの方に駆け寄ってきた。

「父さん、それに母さん？」

「お父様お母様、御機嫌よう。」

「おっ、アインハルトちゃんも一緒か。何だ、ブラカワニさんここ
のお子さん、お前らのここにいたのか？」

「プト、ペットだよ○○」

「マイペットです。」

「あ、そうでしたね……。いや、俺等も偶然彼と知り合ってたね。さ
つき買い物手伝ってもらったんだ。」

「うん、いつものスーパ―、今日トイレットペーパー安かったけど
お一人様1つまでだから…じゃーん！パパとブラカワニさんにも手
伝ってもらって3つも買えましたー」

「そりゃようござんした。っていうかあのカレーの王子様……とい
うかカレーのおじ様、ブラカワニっていうんだ……。」

「見事にコブラカメワニですね……。」

「うん……なんかその辺に落ちてる笛適当に拾って今にも曲芸始め
そうなの見た目だよな……。」

「パパーン！！><」

「マイペッターー！！！！」

昼過ぎ頃……小腹が空いた後藤とタトバは腹ごなしの為にその辺の屋台に入った。

ふうと一息つき、2人とも何を注文しようか迷う。

「タトバ飲み物何にする？」

「んー……とりあえずタトバ！」

「おつまみは？」

「んー……とりあえずタトバ！」

「親父い！とりあえずタトバ！」

「へいタトバー丁ー！」

とりあえずタトバ（Yes食べ物）を注文した後藤とタトバ（No食べ物）は作戦会議を始めた。

探すにしても、タトバの家族は多すぎるし、後藤の方は難しすぎる。2人だけでやったとしたらかなりの時間を費やしてしまうだろう。親父が差し出してきたタトバを貪りながら、2人は深くため息をつく。

「あ、このタトバうめえ。」

「当然だ！うちのタトバは世界一よー！」

ちなみにタトバ（Yes食べ物）とは、『た』『ま』『ご』『と』『マ』トを『バ』ターロールでサンドした食べ物である。

非常に安上がりかつ中々美味なので、読者の皆様お試しあれ。

「はあ……これからどうするか……。」

「まずはプティラ探さないとかなあ……アイツ、暴れると懐いてる人じゃないと手がつけらんないし……タジャドルは最期で良いかなあ……。あ、でもシャウタもメンタル、ドウルツドウルだから早く見つけないと……。」

「火野……和葉ちゃん……伊達さん……。」

「はあ……。」

「きゃー……」

「……！！！！」

その時、割と近くで女性の悲鳴が。若い声だ……後藤とタトバは代金を支払い、早速悲鳴のする方向へと走り始めた。

現地に到着すると、そこでは青い髪の女性が……なんと、この世界に本来いるはずの無い屑ヤミーに襲われており、赤い髪の少女がそれを撃退する為に屑ヤミーを殴っている。

「おいコラ！！ギン姉から離れる！！」

「ノーヴェ早く逃げなさい！！危ないわ！！」

「大変だ……行くぞタトバ！！」

後藤は早速バーストライバーを腰に巻きつけた。

腕のバンドからセルメダルを1枚取り外すとそれをベルトに投げ入れ、ハンドルを一気に回す。

「変身っ！！」

『カポーンッ！』

機械的なアーマーが後藤の周りに出現。

それは彼の体に少しずつ取り付いていくと、彼をセルメダルの戦士

『仮面ライダーバース』へと変貌させた。
変身を終わると、バースはギンガを襲っていた屑ヤミーの下へ行き、
まずは一発殴りつける。

『グウオオオ！！！』

「ヤミー……やはりこの世界にもいたか……タトバ！彼女達をできるだけ遠くに逃がしてくれ！！」

「わ、わかった！！こっちです！！」

「仮面ライダー……なんだこいつ？こんなライダー知らねえぞ！？」
「いくわよノーヴェ！早く来なさい！」

タトバに連れられ、逃げるギンガとノーヴェ。

これで心置きなく戦える……バースはベルトにメダルを新たに一枚
投げ入れると、再びハンドルを回した。

『カポーンツ！シヨベルアーム』

「これで決める！！」

『セルバースト』

シヨベルアーム起動時にセルバーストを発動すると、バースは屑ヤ
ミーの群れに突っ込んで行った。

屑ヤミーをすれ違いざまに殴り倒し、殴り倒し……殴り倒しては更
に殴り倒し、そして殴り倒した。

全ての屑ヤミーを殴り倒すと、バースは変身を解除して後藤に戻る。
タトバ達の下へ向かいながら、何故ここにヤミーがいたのかを疑問
に思ったが、まあ……別にいいだろうとすぐに開き直ってしまった。

『バース………虫けらが……ッ！！！！』

その頃………プトテイラの今もつとも会いたい魚介類ランキング第一位たるシャウタはというと………、

「はい、水が出ましたー。」

「……すごい！かっこいいー！！」「」

何故かヴィヴィオ、リオ、コロナたち小学生仲良し3人組の前で水芸をやらされていた。

そもそも彼が行きついたのは、ブラカワニがいた登家。

その頃にはブラカワニはまだ来ておらず、その時間ワタルは散歩、なのはナカジマ家でギンガ達と楽しく談笑していた為家にはヴィヴィオしかおらず、そこにシャウタがやってきたのだ。

丁度ヴィヴィオがトレーニングあがりに風呂でも入ろうとお湯を沸かして風呂場へ行ったら………何故かシャウタがプカーとうかんで気絶していた。

そしてその隣にはコードネーム『ジョニーさん』の死骸もあった。瀕死状態のシャウタをヴィヴィオがリオとコロナの手も借りて看病、見事復活した彼はお礼に何かしたいという事で………ヴィヴィオ達から『見た目的に水芸できそう！』と言われて現在シャチヘッドを有効活用した水芸の真っ最中だった。

あと、現在は登家からだいぶ離れた学校にいる。

「シャウタかつこいー 仮面ライダーには見えないけどかつこいー」

「うっ……が、ガタキリバと同じ事を……。でも、うんまあありがとヴィヴィオちゃん……。」

「シャウタさんってご家族探されてるんですよね？」

「うん……結構個性強い奴らばかり（役1名除く）だけど……俺とつちや大事な家族だし、絶対に探さないと……。」

「あ、だったらルーちゃんに頼んでみよーよ！」

「ルーちゃん……って、誰？」

「ルーテシア・アルピーノって言って、すっごく頭良いんだよ！時々マッドサイエンティストだけど……でも、頼もしいよ！」

「マッドなのかよ……。」

何か色々と不安しかないが、今のシャウタは藁にもすがりたい気分。水芸を止めて立ち上がると、目立たぬようにヴィヴィオの指示で液状化し、彼女の持っていた水筒の中に入った。

「パパー……ン！！！！><」

「マイペット……！！！！」

「ティオ……！！！！><」

『にゃ……！！！！><』

「アイ……ン！！！！><」

「はいはい、何ですかぶーちゃん？」

ブラカワニと合流して偉く上機嫌なプトティラ。

今は土手でブラカワニを引っ張りながら（というか引っ掻き回しながら）アインハルトと一緒に遊び回っている。

時折ブラカワニが引きずられている摩擦により尻から生じる煙を手で押さえながら『俺の尻がコブラカメワニコブラカメワニギガスキ

ヤン！！！！』と叫んでいるが、設定上ブラカワニメダルは2枚以上存在しないだろうという事でオトヤもダキバットも登夫妻も全く気にしない無い。

というか、オトヤに至ってはもういちいち突っ込んでたらキリが無いので、もう諦めている。

「楽しそうだな、あの紫色の子。」

「うん……ねえパパ、この子生まれたら、オトヤとヴィヴィオも一緒にうんと遊ぼうね！」

「そうだね。それじゃオトヤ、俺達もうそろそろ帰るけど……お前はどうする？」

「もう少しプトティラに付き合おうよ。乗りかかった船だしね……。」

「今日は寮に帰るの？時々は家にも帰ってきてね？お母さん、ご馳走うんと作ってあげるから！」

「うん、じゃあまたね、父さん母さん。」

そう言って帰っていくワタルとなのは。

はあ……と、もう一度ため息をつくと、オトヤも立ち上がり、彼はアインハルトに向けて叫んだ。

「アイー……ン！！暗くなる前に早くプトティラの家族探すよー
……………」

「あ、はー……い！ぷーちゃん、そろそろ行きましょつか？」

「アインもう遊ぶの止めちゃうの……………」

「え……………」

「もう遊ばないの……………」

「えっと……………」

「……………」

「オトヤ君ちよつと1人で行って来て下さい!!」
「殴り倒すぞ貴様。」

アインハルトに対して本気でぶち切れかけているオトヤを何とか必死に止めるダキバット。

ブラカワニの後ろに隠れながら、アインハルトは『す、すみません……』と呟いている。

あと、アインハルトの代わりにダキバットがオトヤに殴られた。ギャーギャー騒いでいる昼下がり……その時だった。

『ようやく見つけたぞ………仮面ライダーオーズ!!!!!!』

「!!!!!!」

突然、マントを羽織った謎の人影が背後から飛び込んでき、プトテイラとブラカワニ目掛けて電撃を放ってきた。

突然の事に驚く2人だったが、アインハルトが彼らを突き飛ばして何とか回避。

オトヤはダキバットを素早くベルトに装着して仮面ライダーダークキバへと姿を変えると、ザンバットソードを手にして彼女らを守る様に構えた。

『ほう……中々良い動きをするじゃないか？』

「なんだお前……何者だ!!!」

「オトヤ君、そいつなんか嫌な感じがします!!気を付けて!!!」
何かを察知したアインハルト……彼女はティオをセットアップし、プトティラとブラカワニを守るように立つ。

『わかってる!』とアインハルトに向かって叫ぶと、ダークキバはジリジリと少しずつマントの男にじり寄り、剣の切っ先を向けた。
『お前みたいな虫けらに興味などない……オーズをこっちに出せ!!!』

「オーズ……?何の事かわかんないけど……とりあえず敵なんだよな……?だったら倒す!!!」

『フツ……出来るかな?お前みたいな虫けらが……この俺に!!!』

そう宣言すると、男はマントを脱ぎ去り、その姿をダークキバ達の前に晒した。

全身緑色の身体に、どことなくカリスっぽいスタイル。

その辺のライダーなんかよりもよっぽどライダーっぽいその怪人……コイツはダークキバ達が戦っているネオファンガイアでもレジェンドルガでも無い……。
その名は……、

『俺の天下だ……!!!』

『オーズの世界』の昆虫系グリード……ウヴァ。

あの世界で唯一生き残ったグリードが、ダークキバ達の前に姿を現した。

「サゴーズおおおおお！！？お前何やってんだ！？」
「あ、シャウター！！！シャウタ助けて！！俺の……俺の貞操がスキヤニングチャージでサゴーズインパクトされるうっうっうっうっうっうっ！！！！！！」

アインと兄弟と何コレカオス（昆虫系グリードよ永遠に）

「登殺すストラトス潰す紫蹴り飛ばす登倒す登ぶつ潰すストラトス殴り殺す登八つ裂きにする登（ry）」

「ハジメー、ぶつぶつ言っでないで手動かしてねー。」

「はいはい。」

「ごめんねガタキリバ、家の修理まで手伝ってもらっちゃって……、

「……………いえ、大丈夫ですよ。」

『ACE』では創立家とガタキリバ達が店の修理に当たっていた。ハジメは先ほどプトティラにヒツサツされたせいか、不吉な言葉を

羅列させて『登』といとところだけ妙に強調させてはその度に力強く釘を打ち、作業をしている。

修理には男手のハジメとカズマ、それと力自慢のナンバーズであるトーレ、そして50人に分身したガタキリバのおかげでだいぶ進んでいた。

フェイトとセツテは頑張る彼らにお茶菓子を用意する係り。

ガタキリバが50人分働いてくれるので、作業効率は何となく良い

…今日中には終わりそうだ。

「でも…何かさ、ガタキリバって初めて会った気がしないんだよね。」

「そう？私はさっき初めて見て結構驚いたけど…。」

「なんつーか…。」もう1人の俺「！見たいな感覚かな…？」

「そう言えばカズマさんが昨日読んでた小説にも出てきましたよねガタキリバとかいうキャラ。なんっていう小説だったかな…？」

「『もう1つのコア大戦』という小説ですよハジメ。」

ハジメの疑問に即答するトーレ。
カズマが一週間ぐらい前に買ってきた『もう1つのコア大戦』という本は、前作の『スマブラの世界』という小説と合わせて1000万部突破の大ベストセラー！

ちなみに今度、実写映画化が決定した…カー イとモモタ スはフルCGらしい。

「ガタキリバ、お礼に夕飯食べて行ってね、美味しいの沢山作るから！」

「うーん…じゃあ、ゴちんになります。」

「ガタキリバ…さん、だったか？アンタ、もしかして家族に『ぶう』とか鳴く紫色のプラトトリケラテイラノっていないか？」

「え？ハジメ、もしかしてプラトテイラ会ったの!？」

「ええ、というか…ここを壊したのもソイツと、あとは登オトヤって奴の仕業。」

「おい、プラトテイラいたってよ…。」

「プラトテイラが…？」

「プラトテイラー！」

「ラーメン。」

「どじつする…。」

男のブラコンと超 融 合すると、もはや誰も手に負えなく無くなる程の攻撃力を発揮するらしい。

「さて……じゃあ、早いとこ他の連中も見つけないともふ。」

「だな……っていうかシャウタ、お前そろそろそのウサギ、ヴィヴィオちゃんに返してやれよ……。」

「あ、私は全然いいですよー！クリス、シャウタさん好き？」

「！」

なお、ヴィヴィオのデバイスであるクリスは現在、シャウタにもふもふされている。

彼はファミコンであると同時に重度のもふマニアであり、もふもふの中のもふもふとも言えるクリスを手に取りご満悦。

あと、もふもふしている間は語尾が『もふ』になる。

ヴィヴィオ、ヴィータ、サゴーズ、シャウタ……何とも奇妙な組み合わせ。

ちなみにコロナとリオはルーテシアを宥める為にあそこに残った…無茶しやがって。

この4人でオーズ兄弟たちを探していたその時……どこからか、声が聞こえた。

「ちよつ、お前足踏むなよー！！」

「おいプトティラー！！」

「ラーメン。」

「お前こそ肩ぶつけただろー！！」

「うるさい！！バカキリバー！！」

「あ、お前こそバカキリバだろー！！やーいバカキリバーー！！」

「何だこのバカキリバー！！！！」

「うるさい、お前ら全員馬鹿だろ。とりあえず降ろせ。俺はガタキ

リバじゃない。」

何と正面から、クワガタカマキリバツタ×50の影が。

それはどう見ても彼らの兄弟の二男……ガタキリバ。

しかもハジメ付。

ちなみにハジメはガタキリバのうちの一体を完璧に乗りこなしている……自慢にも何にもならないが。

「ガタキリバ!? (もふ)」「

「ハジメさん何してるんですか!?!」

「あ、やあヴィヴィオちゃん。元気そうだね。」

「元気そうだねじゃないですよ!!何してるんですかあなたは!?!」

「見ての通り……ガタキリバに乗ってる。」

何とかして喧嘩するガタキリバをシャウタとサゴーズで一纏めにすると、とりあえず2人で一発ずつ殴った。

漸くの事でハジメも解放され、ヴィータは彼に対して『大した奴だ……』と、賞賛。

しばらくしてガタキリバが落ち着くと、シャウタとサゴーズは彼に話を聞く事に。

「プトティラが見つかった!?!」

「ああ、このハジメって奴の家に来たらしいんだよ。んで、店壊したんだと。」

「アイツ何やってるもふか……。」

「なあサゴーズ、シャウタの奴……。」

「言っつな……!!」

クリスをめっちゃもふもふしているシャウタにはもうツッコミを入れないと心に誓ったサゴーズ。

「サゴーズ帰ったらメシ抜きもふ。」

「ツッコんで欲しかったのか!？」

「あ、突っ込んだ。」

『仮面ライダーオーズ……貴様のせいで、俺がどれだけ惨めな想いをしたと思っっている……!!』

「○○?みじめって美味しいの?」

「みじめはあんまり美味しく無いなあ……。あ、マイペット。さつき登さん家でアップルパイ貰ったから後で皆で食べような!。なのはさんの愛がたつぷり詰まって美味しいぞー!」

「やたー!!!><」

『聞けよ!!!』

現代に蘇りし昆虫の王…グリードの『ウヴァ』

かつて『オーズの世界』にて、真木博士扮する恐竜グリードにより『メダルの器』として暴走させられ、最終的には火野映司が相棒である鳥類系グリード『アंक』の命を懸けた最強形態『タジャドルコンボ』により消滅したはずの怪人だ。

それが何故か今、『オーズの世界』とは遠く離れたこの『ダークキバの世界』に蘇り、こうしてダークキバやインハルト達の前に姿を現している。

ちなみにこの2人からウヴァを見た時の最初の感想。

((ハジメ(さん) 2Pカラー……!!))

だったりする。

あと、ウヴァとカリスは無関係。

「お前…レジェンドルガでもネオでも無いよな……？何者だ!!」

「ふっ…いいだろう教えてやる。俺の名は『ウヴァ』。欲望の怪人

『グリード』の1人だ!!」

「グリード…？つて、何ですか？」

「アイン、その辺に『オーズクライン』っていう本あるから読んでいいよ。」

「了解です!!」

ザンバットソードを構え、ジリジリとウヴァとの間を詰めるダークキバ。

只者じゃない……ファンガイアの本能が彼にそう告げている。

『消滅の後……コアをヤツに砕かれていない俺は真木のブラックホールに飲み込まれ、この世界に飛ばされた……。そこで俺はレジェンドルガとか言う連中に出会い、力を貰ったのよ!!』

「なに!？」

まさか、レジェンドルガも絡んでいたとは。

もしかやプトティラ達がここに飛ばされたのもこいつが原因なのだろうか？

ウヴァは体からメダルとカードを取り出すとそれをダークキバに見

せつける。

彼の持つカードに書かれているのは……『ワールド』のカード。

『世界を操る』カードだ。

『コイツの力で、俺は仮面ライダーオーズをここに呼び寄せた…復讐するためにな…！まあしかし…オーズが2人に増えている上に性格まで変わっているとは思わなかったが……。』

「復讐……？復讐は何も生まない……！！大人しくしろ！！」

『絶滅タイムだ！！行くぞオトヤ！！』

復讐…それはダークキバがもつとも嫌いな言葉。

彼は4年前の『JS事件』にて、過去の復讐の為に父や母を本気で殺そうとした経験がある。

あれ以来、復讐は何も生まない…生むのは悲しみと新たな復讐だけだという事を知った彼は、ネオを狩りながらこう言った負の感情を破壊してきた。

だからウヴアも救う……その為に、アインハルトへ呼びかけた。

「アイン！！フェニックスだ！！！！」

「はい！！！！」

『オーズクライン』を読書中のアインハルトはポケットの中からフェニックスのカードを取り出すと、それをダークキバへと投げた。彼はそれを受け取り、ネオロットへと挿入。更にザンバットソードのフェッスルも併用し、最強形態へと姿を変えていく。

『ザンバット・フェニックス！！！！』

炎を身に纏い、不死鳥のような姿へと変貌していくダークキバ。

紅蓮の帝王……フェニックスタイプの降臨だ。

この形態はあらゆるタイプを凌駕する、正真正銘仮面ライダー
クキバの最強形態。

赤く燃え上がる剣を左手で構え、ウヴァへ右手を向ける。

「『光栄に思え!! 絶滅大サービスだ!!!!』」

『面白い……受けて立つぞ!!』

「ねえねえアイン、何はじまるのー? O O」

「これからオトヤ君が、ちょっとあの虫退治するだけですよ。」

「じゃあパン達はなのはさんのアップルパイでも食べてまってる
かマイペットよ!」

「パイー! > <」

『にゃー!!』

「え? い、いや……見てましようよちゃんと……。」

かくいうアインハルトもさつきからオズクラばかり読んでます。

その間に、ダークキバとウヴァはにらみ合い……そして、先に動い
たのはダークキバだった。

彼の放つザンバットソードの衝撃波がウヴァへとまっすぐ向かって
行く。

そしてそれは、ぶれる事無く、ウヴァの身体に直撃した。

『ぎゃ ああああああああ……!!!!!!!!』

「……………あれ？」

『あつけな……………』

『くっ……………き、貴様！！俺は病み上がりだぞ……………そんな俺を攻撃するとは……………貴様それでも仮面ライダーか！！！！！！』

((えー……………。))

なにこの虫怖い。

何故かそんな事を思ってしまった。

ウヴァはよろよると立ち上がると、フツと笑い、ダークキバへ手を向ける。

『俺達の戦いと言えば……………あれしかあるまい……………？』

「あれ？アレって何だよ……………？」

『換装！！亜種ゲー……………ーム！！！！！！』

「……………は？」

ここでルール説明。

『換装！亜種ゲーム』とは『どたばた！オーズ兄弟』の35話にて初登場したオーズを使ったゲーム。

オーズには合計119種類もの亜種形態が存在し、まず最初の人がコンボを除いたオーズの形態名を一つ宣言する。

すると次の人がその形態の胴体と脚を上に乗せ、頭と胴体に、新しい脚部は自分で決める。

以降コレの繰り返し、わからなくなったらコンボ名を宣言して一旦

リセット。

なお、同じ形態名はリセットを使っても1度しか言えず、詰まった時点で言えなかった方の負け。

仮に奇跡が起きて全形態を言い切ったら『プトティラ』と宣言し、クリア。

例を挙げると、『タカキリバ』 『ガタキリーター』 『ガタトラドル』 『ラジャタ』という感じである。

『まずは俺から行くぞ!!ラトラバ!』

「ええ!?ラトラバって何!?!」

『チツチツチツチツ!』

「カウントダウンするな!?えつとえつと……あ、そっぴやアインの好きな漫画にあつたな……まほば!!」

『残念だったな!!それはオーズでは無い!!!!』

「ガーーーーーンッ!!!!」

シヨックのあまり、ダークキバは変身が解けてオトヤに戻り、オーズなだけに『orz』の体制に。

頭を使うゲームにオトヤが勝てる筈が無いのだ。

なんか泣き始めた彼をそつと慰めるアインハルトマジ健気。

『俺の……実力だ……!!』

違います。

オトヤが馬鹿なだけです。

しかしそれでもウヴァは最高に満足しており、今度はプトティラをビシッ!!と指差す。

「○○?」

『次は貴様の番だ……仮面ライダーオーズ……！』

「よしっ！マイペット君に決めた……！」

「ぶきゅんっ！」

こうして、ウヴァとプトティラの壮絶な亜種対決が幕を開けた……。

「あ、プトティラだ……！」

「親父もいるぞ……！」

「おい……なんかあそこにいる緑色物凄く懐かしい感じがする……。」

シャウター一行は、ガタキリバレーダーのお蔭でようやくプトティラ達を発見する事が出来た。

しかし様子がおかしい……何故かプトティラは泣き叫び、ブラカワニは隣にいる中学生ぐらいの少年と一緒に『orz』して、その二人を薄い緑色のツインテールの女の子が慰めている。

ヴィヴィオとヴィータが驚いた顔をしている辺り、どうやらこの二人の知人の様だ。

あとハジメが『ここであったが百年目だ登&ストラトス……！』
ともものすごい剣幕で怒っている。

「ぶええええん……！負けたあああ……！」

「パパン（負けて）シヨ……ック……！」

「ようやくルール理解できたのに……畜生……あのクジャクさえなければ……あのクジャクさえなければ……！」

『タカとコンドルさえ存在しなければ……！』

『俺の天下だ!!!』

どうやら何か勝負して皆負けたらしい。

少年…… オトヤの口ぶりからして亜種ゲームの様だ。

急いでプトティラ達の下へと駆けつけると、プトティラはいち早くシャウタの気配を感じとり、そして彼に抱き着いた。

「シャウター……!!!><」

「プトティラー……!!!」

ガシッ!!!と抱き合う2人。

よっぽど会えて嬉しかったらしい。

ヴィヴィオ達も駆け寄り、オトヤとアインハルトに何があったのか、あの怪人は何者なのかを聞いてみた。

状況を把握すると、シャウタはすくつと立ち上がり、さっきまでずっと抱えていたクリスをヴィヴィオに渡す。

彼はポキポキと腕を鳴らすと、黄色い瞳でウヴァをぎろりと睨んだ。

「貴様…… よくも俺の家族を……!!!」

『フンっ! またオーズが増えたか…… いいだろう。何度でも相手をしてやる、かかってこい!!!』

「絶対に許さない…… 覚悟しろ!!!」

「おお…ついにシャウタが本気を出すぞ…!!」
「あの俺っばい奴…終わったな。」
「シャウタ頑張れー!><」
「勝てたらパパンの熱いキッスをプレゼントするぞー!!!」
「親父1週間飯抜き。」
「パパン超絶シヨーーーーーック!!!!!!!!!!!!orz」
とりあえずブラカワニは放っておいて、そろそろウヴァ対シャウタ
戦開幕。
先手を取ったのは……ウヴァだった。

「タカキリゾ。」
『ガタゴリドル。』
「サジャタ。」
『タカウゾ。』
「シャゴリーター。」
『サトラゾ。』
「ラゴリドル。」
『ソジャゾ。』
「タカゴリタ。」
『サウバ。』
「シャキリーター。」

以下略……だつて長いもん。

「タカジャバ!!!」

『タカキリタ！！！！』

「ガタウゾー！！！」

『シャゴリドル！！！！』

「ソジャゾー！！！！あ……………」

『イエツツツツス！！！！』

「…………シャウタが負けた……………！！！！？？？？」

まさかのシャウタ敗北。

ウヴァさん絶好調である。

そこに、かつてアंकに虫頭と呼ばれていたグリードはもういない……そこにいたのは、オーズの全てを網羅した真正正銘の王者のみメンタルドウルドウルなシャウタはもちろん、こんなわけのわからないヤツに敗北して落ち込む。

彼の落ち込み様は他の今日の比では無い……まさにホッパー並み。それを慰めている初対面のアインハルトマジいい子。

「あ、あの……貴方がシャウタさんですか……？私、こっちでぷーちやんに色々お世話になったアインハルト・ストラトスと申します……あの……げ、元気出してください……。」

『にゃあー！！』

もう一度言おう、マジいい子。

『どうした……？もう、俺に勝てるような骨のある奴はいないのか……？ハツハツハツハツ！！！！！！』

この虫マジ悪い子。
しかし、亜種ゲームではこの中では最強であるシャウタが倒された今、もはやこの中でウヴァに勝てる者は誰一人としていない。
まさにウヴァの天下だ。

だがその時……、『カポーーーーンッ！！』という軽快な音と共に、彼らの前に銀と緑のカラーリングの仮面ライダーが空から舞い降り

た。

その背に、赤・黄色・緑のもう1人の仮面ライダーを乗せて……、

「そこまでだ！！ウヴァー！！」

「皆！！無事か！！」

「タトバ！！」「」「」

「あれ？あれバース？何だアイツもこっち来てたのか？」

それはまさに、人々の最後の希望とも言える存在。

仮面ライダーバースと、仮面ライダーオーズ タトバコンボだった。タトバは皆と抱き合い、再会の喜びを分かち合う。

それを見てバースはホツとすると、彼はウヴァと向き合った。

「ウヴァ……メダルの器にされたはずの貴様が、何故この世界に……」

「…？」

『フンっ、俺の実力だ！！』

「まあ、そんな事はどうでもいい……それより……、」
クルリと振り返り、後ろ見るバース。

そこには倒れたブラカワニやシャウタ。

動けない兄を泣きながら揺さぶるヴィヴィオと、そのヴィヴィオの肩に手を置くヴィータ。

想い人失い、悲しみに暮れるアインハルトと、自分の無力さを悔やむハジメ。

それらを眺め、怒りに唇を噛みしめると、バースは拳を握ってそれを胸の前に押し当てた。

「これは……貴様がやったのか……！！！！」

スにはそんな事通用しない。

ドリルアームでガリガリメダルを削られ、新たに出現したキヤタピラレッジでウヴァを蹴り飛ばす。

更に左手に構えたバースバスターで追い打ちをかけられ、ウヴァはその辺に転がった。

『ま、待て……………俺はまだ、敗北するつもりは無い……………!!』

「知らん!!!お前の事情なんか俺には関係無い!!!」

『お、お前それでも仮面ライダーか……………!?!』

「俺はバースだ!!!」

『カポーンッ!クレーンアーム!』

ドリルアームをしまい、新たに右手にクレーンアームを装備。

それでウヴァを雁字搦めに絡め取り、バースはタトバへと叫んだ。

「いまだタトバ!!!最後はお前が決める!!!」

「え……………」

「お前、あの時俺に夢……………語ってくれただろ!?!」

くタトバ回想、前回のタトバ屋台にてく

『俺さ…タトバキックで敵を倒すの、夢なんだ…笑っちゃうよな…必殺キックで敵倒したこと無いライダーなんて……………。』

『……………変な事無いさ。良い夢だと思うぞ、俺は。タトバ、その夢……俺にも協力させてくれないか?』

『いいのか?』

『ああ……………お前が夢叶えるところ、俺も見たい。』

『後藤さん……。』

〈回想終了〉

「いまこそ夢を叶える時だ!!! 行け!!! タトバ!!!」

「後藤さん……。よしっ!!!」

『スキヤニングチャージ!!!』

オースキヤナーを手に取り、ベルトをスキヤンするタトバ。

ラインドライブを3つの動物の力が駆け巡り、彼のバッタレッグを
変形させる。

その脚力を使い一気に空中へ舞い上がると、タトバは両足をウヴァ
へと向けた。

彼とウヴァの間に3つの『O』が現れ、タトバはそれをくぐりなが
らウヴァへと迫っていく。

(ようやく……。ようやく決まるんだ……。俺の…。俺のタトバキック!
!後藤さんや家族みんなの……。思いを乗せた一撃!!!)

「うおおおおおおおおお!!! せいよ、」

『ギガスキャン!!!』

「せいやあああああああああああああ!!!!!!!!!」

『あ……アンタら…何故俺を…!?!』

「傷ついている人を、放つては置けないよ。」

「ちゃんとした手当はこじやできないけど、少しぐらいなら……。」

「

『アンタら……。』

「なあお前、行くところ無いならうちで働かないか？給料は安いけど……楽しいよ!」

「明るい所だよ、きつと…満足できると思うな?」

『兄貴と……呼ばせてくれ……!!』

『ゴックン!タトバ!!』

『トリプル!スキヤニングチャージ!!』

「うおらああああああああああああああああああ!!!!!!!!!!」

「いやああああああ!!!!!!!!!!えええええええええええええええええ!!!!!!!!!!」

そして別れの時が来た。

あの後、何とかオトヤがタトバを止める為にダークキバに変身した
がタジャドルと共に絞められ、数時間日干し状態に。

気絶しているからチャンスと言わんばかりにアインハルトが彼の手
を握り、『看病ですから!!!!』と豪語した後ヴィヴィオとハジメ
にチョップされた。

帰る方法は剣立家パワーで改心したウヴァが知っており、彼の持っていた『ワールド』のカードをネオロットで使えば帰れるらしい。だが、最後に問題が……、

「やだー！ー！！！><」

「コラプトティラ！わがまま言うな！」

「やだやだアインとティオも連れてくのー！！><」

「アインハルトちゃんもティオにゃんもこっちの人間だからダメ！」

「いやだー！ティオ、ベンちゃんに会わせるー！」

『にゃー！』

「うう……困りました……。」「

アインハルトに懐きすぎてしまったプトティラ。

更にはティオの事も気に入ってしまい、一緒に帰ると聞かない。

タジャドルが止めようとしたら問答無用でタバから殴られた。

「どうしましょうオトヤ君……。」「

「とりあえず連いて行ってあげたら？このカードあれば後で迎え行けるし？」

『それが……俺がそのカードの力をほとんど使ってしまい、あともう一回しか使えないのだ……。』

『にー……。』

「アインも一緒に亜種ゲームするー！ベンちゃんと一緒に遊ぶー！エイジ達にも会わせるー！」

「うん、最後は無理だな！」

「また焼きそば作ってもらうー！ぶえええええん！……」

全員で悩むオトヤ、アインハルト、ウヴァ。

その時、後藤が何かを閃いた様にポンツと手を叩き、プトティラの肩を叩いた。

「ぶえ……？」

「プトテイラ、だったらこうしよう？もし、君達がこのままちゃんと家に帰ったら…いつか、俺達皆で遊びに行くから。」

「遊びに…？」

「ああ。俺も、もう一度タトバに会いたい…何より、コイツの夢が叶った姿を見てみたい。その時、アインハルトちゃんにもう一度焼きそば作ってもらえ。な？」

「……………アイン、また焼きそば作ってくれりゅ……………？」

「はい！実はですね……………ほら、お土産に作ってきました！」

『相変わらず見た目は凄いな……………。』

「なのはさんから沢山パイ貰ったし…、」

「カズマさんとこでも沢山美味しい物貰ったし！」

「プトテイラもまた遊びにおいでよ！今度はその…ベンちゃん？とかいうのも連れてさ！」

「来る……………！><」

『ふつ……………終わりよければ全てよしだな……………！！俺のお蔭だ……………！！』

そうしている間にオトヤはダークキバに変身しており、ネオロットへカードを掲げる。

もう一度会える…そう信じ、彼はカードを挿入した。

『ワールド』

電子音と共に兄弟たちの姿が少しずつ消え…同時に後藤の姿も。何故かウヴァだけは消えない…どうやら残るらしい。

「アインの焼きそば！」

『グオツ（焼きそば）……………？』

「お、美味そうだな。俺にも一口……、」

「ダメー！これプトのなのー！」

そう言っつてラトラーターの魔の手から焼きそばを遠ざけるプトティラ。

しかし、しばらく考えると……………プトティラは焼きそばをテーブルの上に置き、ぱかっ箱を開けた。

「……………やっぱり皆で食べる！アインもそっちのが喜ぶから！〇〇」

「……………何この子いい子ー！」「……………」

「でもタジャ（放送禁止用語なのでこの先をお見せする事は出来ません）はキャベツだけね。」

「訂正、この紫こん畜生！！！」

これからもオーズ兄弟の生活は続いて行く。

仮面ライダーの歴史が終わらない限り、この町の住人が増え続ける限り。

これからも、毎日のようにどたばたと騒ぐ生活は、変わる事無く続いて行くのだ。

ダークキバ的にはこの3年後、NOVEL大戦へ続く！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6361v/>

仮面ライダー×仮面ライダー×仮面ライダー 超スピンオフRe/birth

2012年1月15日01時50分発行